

# 放送人の会

No.73

2016.2. 12

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail [info@hosojin.com](mailto:info@hosojin.com)  
 発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、逸見京子、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須斎恵美子

## 「正しい」と「正しい」

放送人の会会長 今野 勉

### 『やれどやれどが日々…』

昨年「放送人の世界」のゲストは相田洋だった。終戦時、相田一家は旧満州にいた。相田の母は、一人で長男の洋と二人の弟を日本に連れ帰った。途中のさまざまな苦難・危険を母はたたくさんの「正しくないこと」をやつてくぐりぬけた。たとえば一定額以上の金品は持っていけないのに腕時計を下着のパンツに縫い付けていた。あるいは、帰国の乗船直前、末息子が感染症で隔離されそうになったとき大声でわめいて弟を抱きしめ離さなかった。ドキュメンタリー「母と歩いた道」は、亡き母を思つてその時の道を一人辿る相田の記録であった。相田は、2013年、「母と息子 3000日の介護記録」を作った。母を看取るまでの無手勝流の体当たり介護の自撮りだった。介護の専門家たちは、その介護は多くの点で「正しくない」と指摘した。「母と歩いた道」を見て私は、相田の介護はこれ以上ないほど「正しい」ものと思えた。

相田の「放送人の世界」から10日後、ある新聞に、終戦70年企画で、小説家・柴田翔のインタビューが記事が載った。柴田は小説『やれどやれどが日々…』(1963年)の執筆動機についてこう述べていた。「イデオロギーで世界全部が理解できるはずはな

いと思つてついていたから「百分と同じ(戦争)体験をしてきたはずの連中がなぜ集団主義に巻き込まれていくのか」「学生を観察し、小説を書くなかで『自分が正しい』『周りより上だと認められたい』との感情が入り動かししているのではないかと思つた。単純に言えば、人間の中にある弱さです」「自分の意見が間違いない主張するだけでなく、そういう人たちと本気で対話して欲しい。それは組織に縛られないからこそできることです」\*①

### アンダーソンの比較

偶然、その記事の下にアメリカの政治学者ベネディクト・アンダーソンを悼む文が載っていた。筆者は白石隆。アンダーソンの方法論は「比較」。ヨーロッパの政治的権威についての古典とジャワの古い王国の年代記を併せ読むと、欧米の言語世界で政治を語る上で鍵となる「POWER(力)」に相当する言葉がジャワになかった。では、ジャワで「力」に相当するのは何か、という問いから「言語と力」という著書が生まれたという。アンダーソンは、比較して一般論を導き出すことはしなかった。ただ、ある現象を深く理解するために、他の現象と比べるのである。私見で言えば「一般論」

とはすなわち「正しさ」である。アンダーソンは「正しさ」を求めなかったのだろう。

先日、脚本家・佐々木守について取材を受けて、こんなことを言ったのを思い出した。「佐々木守の脚本で監督の実相寺昭雄と組んで作ったウルトラマン・シリーズの中で、ウルトラマンと怪獣のどちらが『正義』なのかわからなくなるドラマが何本もある。彼らは『正義』がゆらぐのを面白がっていた」。

ただの偶然だが、柴田翔1935生まれ、相田洋、佐々木守、ベネディクト・アンダーソンそして私1936生まれ、実相寺昭雄1937生まれ。世代で何かを語るつもりはない。昨夏逝った鶴見俊輔はすでにこう言っているからだ。「団結には恐ろしさがあるんです。『正義になる団結はいいじゃないか』というけど、そうじゃない。正義の団結がまた恐ろしいんです」

社会学者・上野千鶴子の言葉。「鶴見俊輔どんな主義主張にも拠らず、とことん自分のアタマと自分のコトバで考えぬいた」

\*① 朝日新聞 15・12・22夕刊

\*② 朝日新聞 15・12・22夕刊

# 年頭所感

# 2016

(氏名50音順)

佳い年でありますように

石橋 冠

「蛮勇」で映画を撮りました。貴重な体験を積みました。

\*\*\*\*\*

新春ドラマ「富士ファミリ―」放送を終えて

磯 智明

NHK新春ドラマを制作しました。富士山の麓にあるコンビニが舞台の家族の物語です。脚本家の木皿泉さんは執筆にあたり、このようなことを言っています。「過去のものとなったホームドラマを今一度やってみたい」。並々ならぬ決意をもって、木皿さんは今回のホームドラマに臨みました。

最近、ホームドラマをすっかり見なくなりました。家族が多様化し、みんなの共感を得られる家族像を描けなくなったことや、ホームドラマが飽きられ事件モノが幅を利かせるようになったことが理由かもしれせん。でも一方で、脚本家や制作者がホームドラマを描くことに、とても臆病になっていると思います。

向田邦子も山田太一も、橋田寿賀子も倉本聰も、巨匠と呼ばれる脚本家はみな家族

を舞台に、家族の本音を描き、傑作を生んでいます。そこで描かれる家族は決して理想的なものではなく、馬鹿馬鹿しく愚かで、歪んだ偏ったもので視聴者の心を掴んでいました。

家族を描くことは、自分の育ちや下品なところを晒すことにもなりかねません。でも、だからこそ力強い作品が生まれる可能性もあります。今回、木皿泉さんは「富士ファミリ―」に惜しみなく自身の家族像をぶつけ、大きな反響を得ました。ドラマ復活の鍵にホームドラマあり、今こそ、ホームドラマにチャンスと思いました。

\*\*\*\*\*

僕のテレビジョン 市川 哲夫

放送の世界に入って今年で43年目となります。テレビ番組制作から、TBS『調査情報』の雑誌編集に転じてからも、早や8年半過ぎました。放送界でも二身にして一生を経る。経験をしてきました。故村木良彦さんの「僕のいるところがテレビジョン」という言葉(だっただかな?)が好きで、自分の金言としてきました。編集長は3月で退任することになりましたが、新たな居場所です。「僕のテレビジョン」の思いを貫いていくつもりです。

「このところNHK『新・映像の世紀』に嵌まっています。95年の「映像の世紀」も、畏友の加古隆さんの音楽に魅せられ全回、興奮しながら観た記憶があります。新シリーズは前回を凌ぐ出来と評価します。第3回「ヒトラー」第4回「冷戦の時代」と回を追うことに、面白くなっている。スタッフに拍手です。

現在のNHKのストレートニュースはあまりに権力寄りでいたただけないが、Eテレの「日本人は何をめざしてきたのか」とか、「新・映像の世紀」といった番組を観るにつけNHKの「底力」を感じます。凡そテレビ番組は、何人ものスタッフが寄つてたかつて作られるものですが、結局は「個」の人間ひとりひとりの「思い」の結果物だと思えます。それは前述の村木さんの言にも繋がることだと思えます。

須らく、テレビ人は「これは僕のテレビジョンだ」と自負できる番組作りを目指したいものです。ここ数年「・・・の劣化」という言葉が常套句となっています。「劣化」は社会全体に及び、テレビもその範疇に括られかねない状況です。

SNSの発展でメディアの世界でも、アマチュアとプロフェッショナルの境目が、はっきりしなくなってきました。「報道」にせよ「ドラマ」にせよ、放送人は、あらためて「プロフェッショナル」としての誇りを取り戻す一年としたいものです。

(TBS「調査情報」編集長)

サヨナラだけが人生だ!

荻野 慶人

僕は川島雄三監督の映画『暖簾』(1958年)のサード助監督を最後にTV界へ敵前逃亡した。川島は「サヨナラだけが人生だ」という詞が好きだった。千武陵の漢詩『勸酒』の一節(人生即別離)を井伏鱒二が大胆にそう意訳した。

マエケンこと前田健太が、広島カープにサヨナラしてメジャーリーグで羽ばたく。ロサンジェルス Dodgers(ドジャース)へポスティングシステムによる移籍で、カープは現行制度最高額の2000万ドル(約24億円)の譲渡金を受け取る。立つ鳥跡を濁さずでカッコいい。

一方、戦力外通告をされてユニホームを脱ぐ選手も少なくない。昨年末も恒例の「プロ野球戦力外通告」クビを宣告された男達(TBS)が非情な世界をドキュメントしていた。

僕たち大阪野郎には縁深い『上方芸能』が来る5月、48年の地味な出版活動に終止符を打つ。「理由は一つ、経費を償えないのと発行人の木津川計が80歳の高齢になったこと」と言う。編集部員たちも揃って職を失う。華やかなスター街道から遠く離れた市井にも、それぞれの場面転換や終幕があるのだ。

僕も昨年自ら戦力外をいくつか宣告した。先ずは5月に「放送人の会」の理事を退かせてもらった。ここ数年聴覚劣化夥しく理事会や懇親会で貴重な発言を聞きづらい。討論に参加できないでは無用の長物でしか

ない。

放送人グランプリ贈賞式を記録するカメラマン役も、同じ5月の第14回を卒論気分

で最後にさせてもらった。

今から13年前になる70歳の頃、僕は当時流行り始めたDVカメラが面白くなって、僕たちの贈賞式で、芸術祭賞や日本アカデミー賞のようにカメラの放列が見られないのが寂しくて、カメラマンやエディターの経験がないアマチュアが厚かましくも、表彰作品を短く紹介しながら選考委員の講評や受賞者の歓びの辞などを一篇の記録に構成し始めた。

民教協スペシャル『あなたまた戦争です』よく残された妻たちの手記(山形放送)がグランプリの第4回(2005年)が最初だったから、12回繰り返していたことにな

る。

会場のフルショット、ステージのミニディームショット、選考委員席のグループショットを狙うフイックス無人カメラ3台と、僕がハンディで動き回って撮るアップやパンショットを編集した上へBGなどを被せる。稚拙な「撮影ゴッコ」に過ぎないが、僕は夢中で愉しんでいた。聴覚劣化でも、ヘッドホンで編集するから撮影時には気づかなかつた名言珍言に改めて感動したりする。

しかし、ハイビジョン・デジタルのハイテクが進化する速度と範囲に、この1月末83歳になる僕は口惜しいが付いていけない。

そんな僕が頑張っているのは、若い人も慮するだろう。放送人の会の記録がいつまでもアナログ調では恥ずかしい。

今年五月の贈賞式は、僕より若いどなたかにカメラマンをお願い出来ないだろうか！

\*\*\*\*\*

### 私流古寺巡礼 鎌内啓子

3年前から、晩秋から初冬にかけて2泊3日で古都・奈良の古寺巡礼の旅をしている。小中時代の親友が、奈良県生駒郡平群町に長年住んでいる。彼女と奈良の古寺巡礼をしながら奈良を極めるのを人生の晩秋から初冬にかけて共通のテーマとして楽しもうということになった。

和辻哲郎「古寺巡礼」は学生時代に読み、二十代の和辻氏が、唐招提寺、薬師寺、法隆寺、中宮寺、などの寺々を訪れた時の印象を瑞々しい若さと情熱で書いているのに感動したのを今でもはつきり覚えていて、土門拳の写真集「古寺巡礼」は20年前、銀座旭屋書店で全5冊を現役だったので大枚叩いて買い求め定年になったらゆっくりに見て、そして奈良の古寺を旅しようと思っていた。和辻哲郎、土門拳お二人の「古寺巡礼」に誘われる様に私の古寺巡礼は始まった。

3年前は、青春時代の忘れられないほろ苦い思い出の秋篠寺伎芸天に数十年振りに再会することからスタートした。浄瑠璃寺の秘仏吉祥天女像にも運よく出会え、太古

からの永遠の微笑みに感動した。微笑みといえは中宮寺の伝如意輪観音像も世界三大微笑と言われている。法隆寺国宝百済観音像の美しさは何回見ても魅せられる。み仏の悠久の美しさに惹かれ、古都奈良で日本人の原点を確認する古寺巡礼の旅は元気である限り続けようと思っている。

\*\*\*\*\*

### 初場所雑感 北村美憲

福岡県柳川出身の大関琴奨菊が、外国人の横綱3人を退けて31歳の初優勝を遂げた。日本生まれの力士としては10年ぶりのことで、いよいよ来場所こそは綱取りだと世間は賑わっている。

その初場所の2日目、成人の日の休日だったからでもあるが、NHKテレビの相撲中継は双方向特別企画だとか、リモート・スイッチの「黄・緑・赤・青」4つのボタンを使って4択で回答させるアンケート調査やクイズをやっていた。そのなかで特にわたしの印象に残ったことが二つあった。

一つは、これからの大相撲発展のために一番大事なことは何か」という質問に対する答えて「日本人横綱の登壇が圧倒的多数であったこと。もう一つは、「土俵の四隅を飾っている青・赤・白・黒の四つの房は方角と季節を表してもいるのだが、白房の季節は春夏秋冬のどれか」という問題に、冬という答えがほとんどだったことであった。その日、正面の解説を担当していた元雅

山の双子山親方が、「ああ、雪の降る季節だからですかねえ」と言ったので、なるほどそういう発想もあったのかと、見ていたわたしが驚いた。

「青春」という言葉だけは今もかろうじて残っているが、「朱夏」も「白秋」も「玄冬」も、消えてしまった時代だから仕方もないのだろうか。ましてや「青竜」「朱雀」「白虎」「玄武(亀)」に到っては、高松塚かキトラの古墳へでも行かねばお目にかかれないのだから。

しかし、相撲がわが国古来の神事に始まる伝統的な競技だとおもっからこそであるう、日本人力士の優勝や横綱の出現にやたらこだわっているが、土俵の四つの房の由来もわきまえないのが相撲ファンの大部分だというのは、いささか情けない話ではあるまいか。

琴奨菊の郷里、柳川の人たちが熱狂的に大関を応援し、優勝を喜ぶのは当然だし自然なことだが、日本中がまるでそうであるかのような、あたかもそうでなければいけないかのような、マスメディアの口調は見苦しいと、わたしは思った。四年前の夏場所ので優勝した旭天鵬が、実はその7年前に帰化して日本人になっていたからなのだが、たまたま目にした「国内出身10年ぶり」という新聞の中見出しには、笑うよりほかなかった。大リーグのホームラン王が「国内出身」かどうかを気にするアメリカ人がいるものかどうか。

日本の「国技」だった相撲が、世界のスポ

ーツになるうとしていたのだ。だがほんとにそうなるには、改めなくてはならない」とが、また山ほどある。

\*\*\*\*\*

## 消滅の危機！仙台雑煮

木村成忠

「あなた、ハゼが5匹で1万円よ。買うのやめようかと思った。正月準備の買い物から帰ってきた妻がこう嘆いた。15cmほどの焼きハゼが5匹で9800円だという。一匹約2000円。ためらうのも無理はない。とんでもない高級魚ではないか。

宮城県では正月にはおむね仙台雑煮を食べる。仙台雑煮は焼きハゼで出汁をとるのが定番。私も子供の頃から食べてきたし、結婚してからも伝統の正月料理を妻が引き継ぎ、毎年つくってくれている。餅、大根、ごぼう、にんじん、せり、凍み豆腐、ズイキ（芋がら）、紅白の板かまぼこ、なるこ、イクラ、そしてその碗の上にドンとハゼがのる。碗ひとつに一匹のるので見た目は豪華で、白、赤、緑と彩りもよい。

どの家庭も簡単に手に入ったあの焼きハゼがなぜこんなに高価なものになったのか。原因はやはり東日本大震災にあるようだ。

ハゼは松島湾でも獲れるが、焼きハゼと言えば石巻市長面（ながつら）浦のものだろう。毎年「正月の準備に大わらわ」としてテレビ・新聞で紹介されるのが、ここの焼きハゼ作り。この長面浦は北上川が太平洋にそそぐ河口の南側にある小さな入り江

である。大震災ではここも津波に襲われた。家屋が流失し、土地が1m以上地盤沈下するという壊滅的被害を受けた。今も全域が人の住めない「災害危険区域」に指定されている。津波で亡くなった人、地元に残れず転居した人も多い。現在焼きハゼ作りをしているのは、一組の老夫婦だけになってしまった。この夫婦も津波で家と作業場が流されていて、今は北上川上流15kmほどのところにある、仮設住宅から通って作業をしているという。

この長面地区は、私が高校生まで過ごした故郷と同じ町にある。長面浦では魚釣り、潮干狩りをし、子どもたちと海水浴を楽しんだ。

そこが今は見る影もない。ハゼは今季ひどい不漁で前の年の半分も獲れなかったようだ。来季はどうだろうか。このままハゼが獲れなければ、仙台雑煮も消滅の危機である。大震災から5年が経とうとしているが、復興未だしの感がある。（仙台市在住）  
\*\*\*\*\*

## 老いの世迷言

工藤英博

年が改まっても、相変わらずスマートフォン之恩恵にあずかっており、まだまだ使いこなしてはいないが、日常生活で手放せない道具になっている。だが、その一方でアナログ世代としては若干の抵抗感を感じながら。

（汽車の窓から手を握り／送ってくれた人よりも／ホームの陰で泣いていた。）

（汽車の窓からハンケチ振れば／牧場の乙女が。）などの歌詞が昔の流行歌にある。列車の窓が開かなくなって久しいが、別れの光景も目にしなくなった。

窓のせいではない。携帯電話のせいだとジャーナリストの徳岡孝夫さんが、以前月刊「文芸春秋」に「別れが消えた」と題する随筆を載せた。親指ひとつで、さつき別れた人にメールが送れる。すぐに返事が来る。駅に向いて別れを惜しむまでもない。

「ケータイは人から別離を奪った。別離の後に必ず来る孤独をも奪った」と指摘した。別離のいとまがない。つながりつばなしの文化は底辺をどんどん広げたよう。文科省の調査による携帯電話所持率は小学生6年生が25%、中学2年生が45%、高校2年生になると96%になる。しかも、中高生の2割近くが日に50通以上のメールを送受信し、入浴中も携帯を手放せない子供がいるという。

どこか危うくいつか散るから花がいとおいのように、別離と孤独があるから人もいとおしく思えるはずだ。

懸念することがもうひとつ。携帯スマホの極めて即時性のある便利さに慣れてしまったために「待つ」ことができなくなり、私たちは多大のストレスを感じるようになってきたのではないかと、携帯でメールを送ってすぐに返事が来ないと「友達じゃない」と言うものも多くなっていると聞く。ゆつたり落ち着いて漠然と何かを待つ、そんな時間が現代人には耐えられなくなった

のだろうか。今の私たちには「ボーッとしている時間」はほとんどないのではないかと。私の孫たちでさえスケジュールがびっしりで、空いた時間もメールやゲームで追われている。科学技術の発展によって私たちは空想する時間まで削り、時間に追われ、現代は待たなくてもいい社会になりつつあるのだろうか。

別れの悲哀を味わい、孤独に陥り、待ちぼうけを食った昔を思い出すと携帯電話のない時代に青春期を過ごせたことを幸せに思うときもある。

\*\*\*\*\*

## 緩い連帯の必要性

隈部紀生

毎年賀状を書くときに、多少はそのときどきの特徴をとらえた言葉を書きたいと考える。近年は世界や日本の状況と先行きますます読みにくくなり、個人の方はますます老化現象が進むばかりで、いい言葉も浮かばない。

昔から多くの思想家や学者が未来を予測して失敗した例は枚挙に暇がない。近年はインターネットの普及で一個人でも世界に情報を発信できるようになり、情報が氾濫する一方で混とんとして実態がつかめないことも多い。デジタル化は分散化であり、統合が難しくなっている。テロの拡散、格差の拡大なども情報通信技術の進展と関係している。

今後ロボットの人工知能が発展して、人





中年に見ざる言わざる秘密保護

もんじゅとは三人寄れど知恵はなし

原発は自己責任もリサイクル

高齢者一億総活躍は終活で

三つの矢アベノミクスは泡と消え

ゆるぎなく生きる！最近のおス

メ番組から

### 中町綾子

「一億人の大質問！？」笑ってコラ

て！ ダーツの旅（日本テレビ12月30日

放送）の秋田県井川町での1コマは衝撃的

だった。79歳の金田金光さんが農作業倉庫

らしきところで話し始める。「田んぼさあか

つやつぱりイイなあ。田んぼのこう：△%

\$#▲※◎♪Ω\$△%\$#▲※◎♪

@ 田んぼ\*△%&□α#※\*◆#▲※

◎\$△%\$#▲※。文字列は放送のテ

ロップのままだ。50音表記すらできない。

ディレクターが、通りかかった農協の元組

合長さんに救いを求めた。と、「その意味は、

田んぼは愛着持ってるでしょ。自分の作っ

てる稲作だから。でしょつちゅう 毎日の

△%とく通うでしょ。そうすると気分が晴

れて ああ大きくなったなあ 育ったなあ

と そういう意味で 晴れ晴れする」と

のこと。

まさか「そんなスゴイ深い話してたん

ですわ」ディレクターの言葉そのままに私

も思う。自分の暮らしを自分の言葉でしや

べって、人におもねるところがない。その

暮らしを当たり前のことと思ひ、同時に感

謝もする。言葉の意味はわからなかったけ

れども、金田さんが話をする時間は十分に

心地よく映っていた。

年があけて、このところ。「覆面リサー

チボス潜入」(NHKBSプレミアム、14日

28日に再放送で視聴に見いった。イギリ

スの人気番組の日本版だ。企業の社長や幹

部が、変装して新人スタッフとして現場に

もぐりこむ。現場で働く人のひたむきな当

たり前を伝えて気持ちいい。

結婚式場のパントリー（食器洗い）で古

い食洗機を相棒と言っていましたただけ

ど手際よく操る女性、ゲストリレーシオン

（案内役）として送迎のわずかな時間の挨

拶を大切にしている男性が印象的だった。テレ

ビでしか伝えられないものが確かにとらえ

られている。

ひるがえって、ドラマはどうかしら、と

思う。その番組ならではの言葉を紡いで欲

しい、当たり前のことをゆるぎなく、視聴

者にへんにおもねることのないドラマを！

そう思う。

\*\*\*\*\*

### 俳句会への誘い

西川章

初雀かと思ひきや初四十雀

これは一月の放送人句会で私が作った俳

句です。元旦に初めて見る雀を「初雀」と

いいますが、これは初雀かと思つたら、な

んと雀よりもつと可愛い、「初四十雀」だっ

たというわけです。

みなさん放送人句会に参加しませんか。

放送人句会が始まってもう6年になります。

最初は張り切つて参加していた会員たちの

中には、年齢の所為か出席がおぼつかなく

なった方も増えてきました。

昨年放送人の会の新会員から2人の方が句

会に参加されるようになりましたが、もつ

と増えたらなおいいと思つています。

放送人句会は2月に1回の割合で行われ

2回に1回は特別選者として星野高士氏と

いう専門俳人の方が参加しています。星野

高士氏はあの高濱虚子の曾孫です。虚子の

娘が星野立子でその娘星野椿の長男が星野

高士氏なのです。星野高士氏は俳誌『玉藻』

の主筆で、『玉藻』は昭和五年に星野立子が

主宰として創刊し、2年前千号を迎えまし

た。

みなさん放送人句会に参加しましょう。

\*\*\*\*\*

### 「メディア状況と放送人の会」

前川英樹

年明けに、去年1年の「会」の活動を軸に

して少しまとめて考えたことをノートにし

ました。別冊付録になっています。ご参照

ください。

\*\*\*\*\*

### 魔法の秋

吉田賢策

今年はずがしい秋になりそうである。湾

岸では豊洲新市場が11月に開場、流通の流

れが大きく変わる。思い起こせば湾岸地区

の先の大変化は、今から20年前1996年

のことだった。球形の展望台を持つテレビ

局やホテル、高層マンション群が並び、魔

法にかかったように景色が一変した。私事

であるが私もこの年現場を離れ、主として

コンテンツ事業やメディア系の仕事をする

ようになる。

その1996年、WIPOの外交会議で

著作権に関する新しい国際条約が締結され

た。そして前年のWindows 95の発売

と共にネットが日常化、その波に乗りテレ

ビ業界もコンテンツ事業に関する部門を飛

躍的に拡大する。そしてその収益の魔法の

キイは著作権である。

国際条約に関する会議の末席に2年後位

から私も参加する機会があったが、当初か

ら日本側通訳を務められたのが松岡佑子さ

ん。素晴らしい英語力と著作権の知識に驚

かされたが、この時期彼女は当時無名の作

家の「ハリポッター賢者の石」に取り組

み、まもなく日本語版権を取得する。ラ

イツの重要性を語る時、彼女の顔が浮かん

でくる。

TPPの焦点となった知的所有権 薬た

けでなく映像も焦点。テレビの歴史の分た

け展開できるコンテンツも増えた。もう一

度勉強しようかと、新刊の山本隆司著「コ

ンテンツ・セキュリティと法」を開いた。

難しいが…こつこつ読み、新大統領のも

と今秋公開「ハリポッター」新作までに

はモノにしたい。

# 放送人々グランプリ 下馬評座談会

―恒例の下馬評座談会をお届けします。いつものようにA、B、C、Dとあるのは段落記号のようなもので特定の発言者を示すものではありません。今回ラジオに触れていませんので、別項「ラジオのページ」もご覧になってノミネートの参考にしてください―

- A** 最初に放送全体の状況について言うところ、今年度は政権与党が放送にやたらに介入した。BPOはそれにたいして2度にわたってきちんと抗議しているが、放送事業者はNHKも民放もものを言っていない。BPOを防波堤にして穴に潜っていけば風はそのうちに去るだろうという姿勢にみえる。放送法について経営者は外部や法務部などにまかせるのでなく、自分で発言すべきだろう。グランプリと関係ないこともかもしれないが、この1年の放送の状況として無視できない。
- B** 政権の介入によって近々3人のキャスターが交代する。大きな問題だ。放送法の解釈についてはBPOのほかに是枝裕和氏がネットで発言し議論をしているが、放送局の側からの発言は聞こえてこない。放送に関わる者としては「それはおかしい」と言う必要がある。
- C** まず活躍した個人編からいこう。
- D** 10人の人気作家による競作集をブチ上げた八木康夫(TBS)。
- A** 8・15前後で反戦特番ドラマに意欲を少ししているプロデューサーだ。
- B** 既に放送文化基金賞を得ている。
- C** 池井戸潤原作のドラマが目立つ。昭和テレビの松本清張に匹敵する。例えば「空飛ぶタイヤ」「下町ロケット」「鉄の骨」「半沢直樹」「ルーズベルト・ゲーム」「花咲舞が黙っていない」「よっこそわが家へ」「民王」など。
- D** 役者なら「あさが来た」のデイン・フジオカ。多芸、博識、才気煥発の異色逆輸入タレント。「五代友厚」役で人気沸騰。「五代ロス」現象を巻き起こす。
- A** 「赤めだか」と「坊ちゃん」役の二宮和也が大化けた。
- B** 「赤めだか」は談志の話を弟子の談春が書いた本のドラマ化で、談志をやったたけしがいい。談志らしくなくたけしらしくやっている。
- C** 談志のめちやくちやのようで筋が通った独特の個性をうまく演じている。
- D** あんなドラマこそ連ドラで長い期間で見たい。
- A** 二宮和也はうまい。
- B** 二宮は数年前になるが「フリーター家を買った」で好演した。
- C** 「赤めだか」「坊ちゃん」は最近多いSF的な設定や謎解きミステリーと違ってかつてあったストレートつくりのドラマとして

- て好感をもった。
- D** 活動写真みたいでいいね。坊ちゃん「嘘言っちゃいかん」が生きていた。うらなりと飲んで仲良くなるのもいい。
- A** 大化けというが、甘いイケメン・マスクが逆にマイナスになっている。
- B** ゴタゴタSMAPは後で触れるとしてドラマ編に入ろう。

## 【ドラマ】

- C** まずドラマについて概論風には、キー各局のスタンスが固定化している。NTVは土曜ドラマでSF夢物語もあるエンターテインメント性の強い思い切った企画の路線。テレビ朝日は「相棒」とABC制作の推理ミステリーものに特化している。TBSは「半沢直樹」以来だが「天皇の料理番」「下町ロケット」など大作主義というか本格的な骨格をもったドラマで成果をあげ、いろんな賞を受賞している。テレビ東は実験的なもの、小さな枠組みだけど面白い企画で局の性格をあらわしている。
- D** この年末年始ドラマが面白かったと思う。「赤めだか」(TBS 12月28日放送)「坊ちゃん」(フジ1月3日放送)「いつかこの恋を思い出さなくともいい」と泣いてしまおう。(フジ月曜午後9時)など。「いつかこの恋」の脚本を書いた坂元裕二はタイプは違うが、山田太一の路線を継いで行く作家だと思ふ。若者風俗のとらえ方が非常に意表をつくもので、楽しみにみている。
- A** 相変わらず低視聴率だが。
- C** 「コウノドリ」(TBS 金曜午後10時)は綾野剛主演で産婦人科医、外科医、内科医がチームで様々な出産に対処する。病院ドラマの原型は「白い巨塔」でドラマの軸、葛藤は権力争い、学閥派閥の争いを描いた。それはイデオロギー的な権力の二重構造を医療の現実に見ているわけだが、それが医療のすべてだろうか。「コウノドリ」はそれと違って現場肯定だ。単なる現状肯定ではなく、医療の現場の未来を信じて番組は作られている。権力・経営対現場・労働者という2項対立という作り方を克服する知恵を出さないとこれからのドラマ、いやドラマだけでなくドキュメンタリーもバラエティーも、進化しないとと思う。そんな芽は出かかっている。
- D** 昔の助産婦さんが出てくる。最末端での助産婦の功績をちゃんと認めてそこから出発している。
- A** ドラマではないが、「ドクターG」(NHK 金曜午後10時)はクイズ・バラエティー形式で指導に当たる総合診療医と若手の研修医が討論しながら診断を進める番組で、非常に専門的な内容だが、医療の現場が実によくわかる。これも医療の現場の未来を信じて作られている番組だ。
- B** 今年度ドラマ全体の平均視聴率(夜の連ドラ中心)が10%を切った。昨年度まではかろうじて10%を超えていた。全体的にドラマの視聴率は落ち込んできており、東海テレビは昼の帯ドラマの放送を打ち切った。ドラマは減ってお金のかからないバラ

エッセイに代わっている。

**C** 坂元裕一脚本の作品のように、なるほどと考えさせるものもあるのだが、そうした作品は総じて視聴率は低い。今年度の高視聴率ベスト3は「あさが来た」「J・マッソン」「まれ」みなテレビ小説だ。

**D** はつきりしてわかりやすい物語をことさらにわかりやすく作っている。顔の表情を強調し、セリフを怒鳴らせ、物語は目的がはつきりしていて苦難の果てに必ず成功する。わかりやすいのだ。そうでない作りの「コウノドリ」や同じ坂元裕一脚本の「問題のあるレストラン」の視聴率は低い。

**A** 池井戸潤原作ドラマはTBSの伊東田脚本・八津弘幸、演出・福沢克夫などのトリオが目立つ。TBSは今年「下町ロケッ ト」だが、教字は「半沢直樹」に遠く及ばない。メガヒットのスケールが小さくなっ てドラマ全体の数字が小さくなっている。

**B** NHKが地域発ドラマを4年前から始めてもう30本近く出ている。今年度も毎月2週に1回くらいやっているがキー局制作のものとは違う。稚拙なところはあっても地方色がテーマが身近なものが多く、期待している。参考までに10月以降のものを挙げておく。「ガッツンガッツンそれでも」

「ゴー」(岐阜)「私の青おに」(山形)「東京ウエストサイド物語」(八王子)「農業女子はらへ娘」(北海道)「いとこの森の家」(福岡)「インディゴの恋人」(岡山)。

**C** 「インディゴの恋人」は倉敷の大原美術館が舞台でフランス映画のようなしゃれ

た作品で、独自の新味を出している。藍染めの職人と女流画家の物語だ。

**D** 始まった当初は地方局の開局何周年記念番組として何本か作られたが、最近ではBSプレミアムでレギュラー枠で放送されている。

**A** 地方局ではドラマを作る機会が少ないのでドラマ制作希望の人たちのリクルートという意味はあるが、大きなイベントで技術、営業みな一体化して盛り上がるのが何より大きい。やりたいという希望の局が多く、順番をつけて次々にやっている。視聴者参加型で地域といっしょに盛り上がる意味も大きい。

**B** かつてTBS系列は「東芝日曜劇場」で大阪、名古屋、福岡、札幌の局が順番にドラマを制作していた。明らかにそれぞれの局の制作力はつく。

**C** これまで地方局制作の番組ではドキュメンタリーを多くみてきたが、こころしたドラマのほうが地方局のやる気志を感じる。個々の作品に対する評価でなく「地方発ドラマ」という企画全体を評価してもいい。

**D** 国際ドラマフェスティバルで4年前からそんな声があつてNHK以外の地方発ドラマも継続して見ているがレベルが上がってきた。

**A** 特に数年前「ミエルヒ」を作った北海道のHTV、今年度「名古屋行き最終列車」を作った名古屋テレビ素晴らしい。

**B** 「名古屋行き」のプロデューサーは大池雅光。

**C** 「猫侍」というドラマシリーズがある。顔が濃い北村一輝が主演で猫を懐に入れた素浪人を演じやたらに強い。ネット6や5

いっしょ3チャンネルなど、関東、関西の独立局の組織が協力して制作にあたり、全国の独立局や民放BSで放送され、映画も制作されている。日光の江戸村でロケをしている。

**D** セット、大道具、小道具など美術などのスタッフは独立局にはないので専門の業者が入っている。

**A** 最近のテレビの画面には猫が実に多い。犬はソフトバンクのCMだ。

**B** 家畜として猫の数が犬を上回ったそう。だ。「猫侍」のあなごに「オトナ女子」のちくわ、「週刊ニュース新書」(テレビ東)で田勢康弘のそばでウロつくにやーにやーにITCMのボス猫(笑い)

**C** 名優として猫は引張りだこだ。

**D** 「半沢直樹」などのドラマは、活劇というか東映やくさ映画の現代版というか、いじめられて耐えに耐え最後に高倉健が殴り込むというパターンだなあと思う。あれは一体なんだったのだらう。大衆は高倉健の時代にあれが欲しかった。

**A** その路線の「下町ロケッ ト」はギヤステイングが面白かった。ドラマがどこに突破口を見つけるかはそのときそのときで違うが、キャストイングは案外の突破口で、新しいドラマを生み出すこともある。

**B** トレンディードラマの亡霊がずっとドラマを支配してきたがそれがいよいよ終わ

った。F1頼り、F1信仰が最後を迎えている。ゴールデンアワーにF1はもうない。いまやF2、F3だと切り替えが行われて、うまく行ったり、行かなかつたりしている。

**C** 「下町ロケッ ト」や「ドクターX」といったれんみたつぷりのあざといドラマが作られる一方でゆるいドラマ、例えば「おかしの家」(TBS水曜午後11・53)が作られている。大人になっても子供のままの登場人物が複数出てきて、ドラマの展開を急がない緩いドラマだ。

**D** オダギリジョーの主演。下町の駄菓子屋が裁判で店を取られ、30過ぎた働いているかどうかわからない男と界限のドラマ。問題提起らしいものはなく、日本の隣近所の絆が壊れて行く。小さな作品だが面白く見た。

**A** 「おかしの家」にも「いつかの恋を思い出すとききつと泣いてしまふ」にも八千草薫が出演していてどちらも存在感がある。最近の八千草はいい。

**B** その意味では「コウノドリ」はよく見るとオーソドックスな作りで、あそこに帰って行くといいなあと思ってた。

**C** 「あさが来た」は実は面白い。これまでにインテリ女性、著名な女性を主人公にする女性解放の歴史を観念的に捉えたインテリ女性ものが多かったが、これは実業家、広岡浅子という具体的な女の社会進出だ。あさ役の波瑠の力演が光る。

**D** 時代劇では「真田丸」だが、子供のころ



メンコで真田十勇士を必死に集めた。十勇士を集めると賞品が貰える。しかし寛重蔵、穴山小助、三好青海入道、根津甚八などしか出てこない。

**A** あれは江戸時代の幸村ファンの創作だから、史劇を仮設化して現代に反映させる「大河」の理念になじまないのだ。

**B** ドラマ「破製」(NHK 土曜ドラマ午後10時)を面白くみた。気持ちの悪いドラマで、高齢者はほっといてもいずれば死ぬ。そのお金を若者に回せばいいという官僚的な発想の人物があり、その言い方に怖さがある。椎名桔平主演。

**C** 「真田丸」では草笛光子、グルメドラマ「鴨川食堂」(BSプレミアム 日曜午後10時)の岩下志麻もいい。老いた女優さんが連ドラの中で庭の置き石のような感じだ。

**D** 「64」は原作が濃厚だ。

**A** 「洞窟おじさん」(BSプレミアム 10月木曜夜9時)はどうだろう。けったいなドラマで洞窟に住んでいる男のほとんど実話。リリー・フランキーが主演で、最初はバカにしていたが気が付くと4回全部みていた。構成も面白いが、演出の吉田照幸はドラマでなく演芸系で横紙破りの作り方をする。

**B** 今村昌平の映画の日本人のパワーを感じる。吉田照幸は「あまちゃん」のとき演芸からドラマと呼ばれた経歴の男だ。原始生活の物語だが出演は尾野真千子以下なかなかいい。

**C** 昨年3月18日放送で賞の対象期間はずれるが「リブラ・シング」は「あまちゃん」の井上剛が監督で映画にもなった。フクシマから神戸に来ている者たちが一緒にフクシマへ旅にでるロードムービー。4年経った震災を新しい視点で捉えている。脚本がNHKの特集ドラマ「ラジオ」を書いた一色伸幸、井上剛はBKのとき「その町の子」を作り、震災をずっと考えてきている。思いのこもった作品だ。

**D** ドラマの推薦番組に「レッドクロス」(TBS 8月1日、2日午後9時)を加えたい。シベリヤ抑留の女性、太平洋戦争の看護婦たちのドキュメンタリーはあるが、実態を描いたドラマとして評価しておきたい。

**A** 戦争ものとしては嘘のないドラマだと思っただが、日韓中シンポジウムで「中国人の女性と日本人の女性が仲良くしかも平等な感じで共棲していたのは嘘だ」と言われた。そうかと思っただが、あの番組は日本人は差別しなかったと描いていたわけではないだろう。

**B** 寒河江氏の「希望の翼」でもそうだが、日本人と朝鮮人が仲良くするというものはあり得たと思う。「レッドクロス」も日本人の都合のいいように作られたものではない。

**C** しかし、中国、韓国の意見は「嘘だ」とは言われないが、そのように評価されることで全体の構造がみえなくなる」というものだ。

**D** ドキュメンタリーではないので、その

時代にどう向き合ったかの人間が描かれればいい。しかし戦争を真正面からリアルに描くのは難しい。日本人が作ると日本人は大きく、中国人は小さくしか描けない。見る日本人は主人公の日本人に感情移入する。やはり難しい。

**A** ドラマで「遺産争続」(テレ朝木曜午後9時)「偽装の夫婦」(日テレ水曜午後10時)が面白かった。「遺産争続」はワイドショーのネタそのままの感じ。「偽装の夫婦」は遊川和彦脚本のラブコメディ。

### 【ドキュメンタリー】

**B** ドキュメンタリー、情報番組に入ろう。

**C** 戦後70年を記念して、戦争を中心に歴史認識に触れた作品が多かった。いま世間を見渡してみると、40代、50代の社会の中心にいる人たちは戦争については3世なのだ。戦争体験はなく、おじいさんのものの考え方を引き継いでいたり、そうできなかったりする。

**D** 80代、90代の戦争体験の証言は最後の証言としてよく取れてはいるのだが、10代、20代で戦争を体験し、長年生きてきたこれらの証言者たちが今の世の中をどう思っているか、番組の制作者は引き出していない。中にはそうした証言を引き出した優れたドキュメンタリーはいくつかある。

**A** というか90歳台の証言者たちは当時は10歳台後半からせいぜい20歳台前半だった。そのダブル・イメージ(複眼)で視聴者は想像できただろうか。

**B** 1995年、阪神淡路大地震、地下鉄サリンがあった年に「映像の世紀」は11本のシリーズで放送している。それは戦後50年の年でもあって、20世紀とはどんな時代だったかを見事に語っている。戦後70年になって「新・映像の世紀」(Nスペ、日曜午後9時)が始まる。

「新・映像の世紀」をみると今の時代意識で歴史をとらえていると思う。歴史学者は新しい歴史的な事実を発見するのが仕事かもしれないが、ジャーナリズムの仕事は過去の歴史を今の時代意識でどう読み取って行くかにある。ドキュメンタリーの腕はその点で、その芽生えはある。

この20年の間に世の中は相当変わってきて、マネー資本主義が世界を完全に制圧した。資本が投資するのではなく投機する時代だ。悪い国を懲らしめるには戦争より経済制裁の方がダメージを与えることができる。そんな時代だ。

**C** いや、経済制裁で苦しくなり、ヤケクソ気味に日本が戦争を仕掛けたのが太平洋戦争だ。経済制裁という名の弾丸や武器は、平和とは無関係だ。

**D** 「新・映像の世紀」ではスパイがいろいろ出てくるが、彼らは裏切るときは意識して、覚悟して裏切っている。アメリカのマンハッタン計画で原爆を開発したポーアはルーズベルトに会って面と向かって文句を言っている。国を裏切ることについて彼らは信念をもって行っているのだ。日本の外交は甘っちょろいが、そんな裏切りがあ

ることは知っておく必要がある。

- A** 「密室の戦争」(Nスベ、8月2日放送)はオーストリアの日本人捕虜の話だ。アメリカの兵隊は捕虜になっても自国の損になるようなことは言わないという教育を受けているが、日本兵は捕虜になると極秘事項でもポロポロ明かす。彼らは作戦について熟知しており、詳細な戦中日記を書いている。オーストリア軍は日本兵の遺体からその日記を集めて分析する。日本兵の捕虜は尋問するといんどん喋る。それが日本兵の特性だと言っていた。その情報が前線にすぐ伝えられ、オーストリア軍の作戦に反映されたのだからニューギニア以降の日本軍の連戦連敗はもつともなことなのだと感心して見た。
- B** 生きて虜囚の辱めを受けずと教えたが、虜囚になった後は教えていないわけだ。
- C** 戦場でのストックホルム症候群現象だ。
- D** 「新・映像の世紀」でも見たが、「これから死体の映像が出ます」というお断りテロップのスーパーは子供への配慮かもしれないが残酷さを強調するものではないだろうか。
- A** 3・11の直後は死体の遺族が見ているかもしれないから原則として死体の映像は出さないことにしていた。しかし歴史的なある程度年月を経たものは、その事態の残酷さを伝えるには死体を見せる必要があるとした。津波の映像の前にお断りのスーパーをするというのは妙な形式になっていると思う。

**B** 死体の映像はかなり見たがお断りスーパーがあったのは例外的だと思う。昨年のベリリュー島にはスーパーはなかった。

**C** あれはアメリカのフィルムだから。

**D** 「新・映像の世紀」のベトナム戦争の最後の映像は残酷だった。ヨーロッパ戦線の最後でアウシュビッツに入って行ってそれをドイツ人に見せる映像も強烈だった。累々たる死体を引き出して「お前たち見ろ」とドイツ人に見せた。

**A** イタリアのムツソリーニのつるし上げ屍体やモロ首相が赤い旅団に暗殺されたときの写真、そしてベトナム戦争の写真が有名だが、それらが世の中を動かしたことも確かだ。

**B** お寺に行くくと地獄絵を見るが、日本人は浄土思想から死体を恐れているのだと思う。地獄絵という物語性によって死体のリアリズムから逃げるのだ。

**C** ドキュメンタリーでとりあえず3本挙げたい。NNNDキュメント「南京事件」(NTV 10月5日深夜放送)はオースドックスな手法で核心をついていた。NHK「書き換えられた沖縄戦」(ETV特集 8月15日午後11時)は沖縄が全く救われていない、この本質が分かった番組、「母と歩いた道」(BSプレミアム 12月6日正午)は相田洋さんの作品。大陸からの引き揚げの難儀を集約してさらにそこから一歩つきぬけたところでまとめている。

**D** 相田氏の作品は「母と息子 3000日の介護記録」の前編というべきもので、

母親と満州から引き揚げて来た道を、相田氏が記憶を頼りに、中国のコーディネーターと二人だけで満州を走り回って撮影した作品。

**A** あれは全部自分のカメラで撮っている。

**B** 「南京事件」は兵士の手帳を集め、そこに書かれたことをもとに、そのとき南京の川岸で何が起こったのか克明に追い、写真と現在とを比較しながら実証して行く。

**C** あの手帳については1978年に放送されている。福島の人だ。それに事件全体についてと新しいデータを加えて作り直された。

**D** 現在の政治状況のなかで制作現場にはかなり圧力があつたそう。

**A** 死者の数は別としてあれを見ると「南京事件はなかった」とは言えない。

**B** 昔の写真を分析してどこから銃撃したか実証していた。

**C** あれをみると日本軍が捕虜の扱いを全く知らなかったことがわかる。何万人という捕虜を捕まえて食事を与えることができない、殺すしかない。情けない。

**D** 国際法、ジュネーブ協定では捕虜の扱いはきちんと決められていて、日露戦争のとき日本軍はそれを守ったのだが、いつのまにかそうでなくなつた。

**A** NNNDキュメントは放送時間が深夜できびしいのだが、それで生き延びたと言っていた。

**B** 「書き換えられた沖縄戦」は戦争に協力したかどうかで戦後補償の受給が決まる

ので名簿を書き換えた話だ。

**C** 「私はどこに還るのか」中国残留孤児の歲月( NHKBS1 12月23日午後7時)文化大革命の中国で徹底的に苛め抜かれ、日本に帰ってくると「お前は中国人だろ」といじめられ、「私は何人ですか」と問いかけている元中国残留孤児の重い証言である。ゲオルギューの「25時」だ。

**D** 戦後70年については「GALAC」が特集記事を作った。番組の数の多さに驚くが、個々の番組を丹念にみると歴史を今の視点でとらえる姿勢に乏しい。

**A** 隣近所の日常生活を情緒的に描く番組が地方局に多いが、ほとんど平凡な視点のものに終わっている。

**B** ETV特集が「日本人は何をめざしてきたのか」(土曜 午後11時)を4回放送した。戦後全体を概括しているものが多く、年表を見ているような感じだ。個々の問題をつつこんで描くことはしていない。教育特集では教育基本法が何年にできて何年になつたというだけで、戦後教育の中で何が生まれ何が培われたかに架構していないのが惜しい。

**C** 年表はきちんと作られていて頭を整理するのはいいのだが。

**D** かつて大島渚が「敗者は映像を持たない」と言ったが、そうだと実感するのがアメリカの映像だ。米軍機がカメラとシンクロして機銃掃射をする映像のドキュメンタリーがあつた。あの映像は凄い。それに近い「よくこんな映像がある」と思わせるの

座談会出席者



松尾幸一氏



石橋冠氏 逸見京子氏



藤久米氏



吉田賢策氏



渡辺紘史氏



鈴木典之氏



西村与志木氏



河野尚行氏



隈部紀生氏 前川英樹氏

が「新・映像の世紀」にはある。

**D** 「独裁者は何故生まれたか」の前に世界は何をしていたのが気になる。20世紀には東西双方に独裁国家が生まれたが、21世紀には生まれないのか。ヘイトスピーチに集まる若者たちをみると独裁国家を生む怖さに近づいているように思う。「新・映像の世紀」は映像を積み重ねて独裁への怖い歴史を描いている。

**A** 「戦後70年 日本の肖像」(Nスベ)は3つくらいのシリーズになっていたが、戦後の歴史をきちんと振り返っている。**B** Nスベ。「原発事故から5年」ゼロからの町再建(1月23日放送) 檜葉町の記録がよかった。

**C** NHKはニュースに手足を縛られて身動きがとれないが、NHKの意地はドキュメンタリーに表れているようだ。**D** ETV特集「精神障害者殺人はホロコーストのリハーサルだった」(11月7日放送)はハートネットTVで、前にドイツの精神科医が精神病患者を囲い込んで殺し、それがホロコーストの前哨戦だった、という

番組があった。今回の番組ではそのときの精神科医がその後ナチスに協力してその仕事を続けていたこと、ホロコースト全体も丹念に追っている。アーカイブからの発掘は地味だが続けることに意味のある番組だ。

**A** 「報道ステーション」で「日米地位協定」(テレビ朝 6月23日)をやった。イタリヤ、ドイツの第2次大戦後の米軍の軍事基地を取材した。戦後すぐは戦勝国の3米軍は自由に使っていたがだんだん協定は変更され米軍は自由に使えなくなった。翻って日本をみると、沖縄にばかり焦点が向くが、実は関東の空の3分の2は米軍の許可がないと使えない。日本の飛行機は飛べない。関東だけでなく日本中いたるところでそうで、それは日米地位協定で定めている。非常に印象に残った。

**B** 「新・映像の世紀」の第1週は「第1次大戦。あの戦争の結果ヨーロッパには皇帝がほとんどいなくなり、王国、帝国が消え、ロシアはレーニンの社会主義国になるのだが、同時に難民の世紀が始まった。第2週はアメリカの「グレートファミリー」、

第1次大戦で結局アメリカの大企業が儲かったという話。今のシリア、イラク、パレスチナはかつてオスマントルコの領土で、それにアラビアのロレンスなどイギリスが手を出して今の形にした。中東の火種はイギリスとフランスがまいた。第3週は「時代は独裁者を求めた。独裁者を待望するのは大衆そのものだ。何も決められない政治にいらいらした大衆が独裁者を担ぎ出す。自分を安全な場において弱いものを叩く。それは現在もそうではないかと言っていた。ヒトラーは自殺する前「ナチズムは私と一緒に滅びるがやがて蘇る」と予言して死んだ。

それぞれのテーマが現在につながっている番組だ。

**C** 4週は「世界は秘密と嘘に覆われた」というタイトルでいろんな諷刺活動が戦争の原因を作っているという内容も現在につながると思っただ。

**A** 大衆運動を伝えるものに「TBS報道の魂」SEALS2年の軌跡(TBSBS 1月16日放送)がある。2年前からよくフ

オローしたが、これからもフオローすると思う。国会前のSEALSだけでなく、戦争体験者に会い、戦争体験者とわれらはつながっていると語らせるなど、静かな丁寧な作り方だった。

【情報系番組ほか】

**B** 情報系番組の表現にユニークなものが目立った。

**C** 「ぶらタモリ」(NHK 土曜午後7時半〜)が面白い。地層がある、坂があるといった実証がユニークな視点だ。タモリの知識の奥深さがわかる。その知識をきりげなく、独り言のように呟いている。町や村の成立をそうやって紡いでいる。

**D** 長崎から始まった第2シリーズでは富士山、軽井沢、熱海が面白かった。わくわくする新発見があった。

**A** 「火野正平のニッポン縦断ころ旅」(NHKBS 不定期放送)がいい。自転車に乗って横町に入ったり、おぼちゃんに声をかけたり、視聴者からの手紙を受けて思い出の風景を辿って行く。それだけの番組だ。

彼の歌の記憶力は物凄い。自転車に乗って口ずさんだ曲や挿入歌をまとめた番組もあった。

**B** かまえていない緩さがいいのだ。

**C** 『プロ野球戦力外通告』(TBS 12月30日午後10時)はせつなく面白かった。昨年度に次いで2回目。

**D** バラエティーは若者が見なくなって苦闘している。生活実用ノウハウ、漢字熟語などのクイズなどがほとんどだが、最近はやブナー系のもので気になるものがある。

『ローカル路線バス乗り継ぎの旅』(テレビ東土曜午後6時)、『ぶちやけ寺』(テレビ朝月曜午後7時)がある。お坊さんをテーマにしたバラエティーはこれまでなかったと思うが、最近はお坊さんブームである。お坊さんの月刊誌が売れ、お坊さんを通して歴史をみる、作法を教わるなどいろんな切り口がある。そして『しくじり先生』(テレビ朝月曜午後8時)だ。

**A** 『しくじり先生』は日韓中フォーラムに出品されたが、放送文化基金賞エンターテインメント部門最優秀賞を受賞した。深夜から出てきてゴールデンに上がってきたのだが評価していいものだと思う。

**B** 『ぶちやけ寺』はレギュラーのお坊さんが5人と女性の小藪千豊が面白い。

**C** 京都の人はお寺と付き合うのはえらいことだと言うが、この番組ではお金のことで檀家騒動その他ホンネでいろんなことを喋っている。

**D** 『人生の楽園』(テレビ朝月曜午後6時

〜)と『ザ鉄腕ダッシュ』(日テレ、土曜午後7時)を推したい。

いまテレビ局は視聴者をどうとらえるか、若者と老人の間にネットが入ってきて混乱している。その中で安定してシルバーを狙って心安らぐ番組が『人生の楽園』だ。

**A** 『鉄腕ダッシュ』は無人数に小屋を立てたり、原始的なアナログの暮らしをしている。あのTOKIOの姿には勇気を貰うことがある。

**B** NHKの報道部の中村直文氏を推したい。『未解決事件追跡プロジェクト』を担当した。グリコ、オウムから始まって最近メルトダウンを数回にわたって追った。執念と勇気を感じる人だ。

**C** 番組ではないが、HBCの長沼修氏が書いた『北のドラマ作り50年』が面白い本で、ローカル局のドラマがいかに情熱をこめて作られたかが語られている。長沼氏がかつて森分寿男氏のADをつとめ、HBCの社長を経て現在札幌ドームの社長。

**D** 総括的にはフジテレビの凋落が気になる。これまで素晴らしい人材を生みながらいったいどうしたのだろうか。

**A** ドラマだけでなく報道でも80年代はフジがスクープ連発だった。

**B** 失敗が成功を準備すると言うが、フジは逆に成功体験者をどんどん要職に引き上げてそれが失敗につながった。

**C** 若い制作者の提案は要職にある成功体験者に「そんなものあたるわけがない」と頭から言われる。現場は息苦しい。

**D** F1はドラマから去ったと言われるが、フジはまだF1を狙うと発言している。

**A** SMAP騒動の話をしよう。今年のテレビ現象としては許せない。

**B** ドラマの視聴者にF1がいないこととシンクロする。

**C** 局は昔からジャニーズに及び腰なのだと感じる。どうして安倍首相に質問したりするのだろうか。国会ではもつとやることがあるだろう。

**A** フジの記者会見生中継が36%とった。**B** あれはキムタク以外の4人に対するジャニーズの公開処刑だそう。**C** フェイスブックでジャニーズは圧倒的に評判が悪い。事務所側のパワハラだと言われている。テレビは何の論評もせず会見の垂れ流しだ。

**D** しかしジャニーズは何年にもわたってタレントを世に送り出してきた。**A** グループとして売り出し、売れたらバラ売りにし、それぞれ大型タレントに育ったわけだが、大型タレントになって事務所としては重荷になったのではないか。これからSMAPは変質するだろう。

**B** 多くの予備軍からどんどんタレントを吸い上げてくるのがジャニーズシステムで大型になると事務所は確かにもてあます。**C** しかしそれをやめさせると団体の面目が潰れるから、置き屋の組織と同じで足抜けはさせない。そんなシステムで、ジャニーズが生きている限りジャニーズ事務所の

勢力は続く。テレビ局に対するコントロールの力は他の芸能事務所の比ではない。

**D** 実質的には別会社になっていった。飯島チフマネージャーの思うままにやっていた。

**A** ジャニーズ事務所は乃木坂にあるが、テレビ各局に乃木坂番がある。うっかり問題の処理を間違えると彼らはそこに入り込んでくる。

**B** AKBもテレビ局にとっては同じようなものだ。

**C** しかしAKBはかつてのアイドル集団とちがって活発に発言する。ドラマタレントで優れたコも多い。SMAPも50歳に近い。なぜ一人ひとり自立しないのか、できないのか。

**D** 村八分が怖い。語源は撥撫(はつむ)と言って、おどしすかして現場を締め上げる。テレビ局とジムショとタレントの関係が問われている。

**A** このくらいにしましょうか。

### 座談会次第

日時 1月29日(金)午後2時〜5時

場所 千代田放送会館 3階会議室

出席者 石橋冠、伊藤雅浩、隈部紀生、

河野尚行、鈴木典之、西村与志木、

藤久ミネ、逸見京子、堀川とんこう、

前川英樹、松尾羊一、吉田賢策、

渡辺敏史



## ラジオのページ

大きな転換期を迎えたラジオ

石井彰

ラジオは大きな転換期を迎えています。

ひとつは、これまでのラジオを支えてきた生ワイド番組の人気パーソナリティーが、高齢を理由に番組を降板し始めました。

首都圏のラジオ番組の中で、高聴取率一、二を誇ってきたTBSラジオ『大沢悠里のゆうゆうワイド』(月)金、午前8時30分～午後1時)が4月8日をもって終了します。後任には、深夜放送のスター・伊集院光が登板すること。暖かい声と人情味あふれる大沢悠里さんの降板はとても残念ですが、伊集院光が、どんな新しい顔を聴かせてくれるのか楽しみでもあります。

かつて大沢悠里さんには長時間インタビューをしたことがあります。「いま情報、情報」と言うけれど、人情も愛情も情報です」『番組スタッフに厳しく言っているのは、電車やバスで通勤して、社会の変化を感じること、それと仲間内で飲むのは禁止』と、言われたことが今も心に深く残っています。1986年から丸30年も続いた長寿人気番組の終了は、たんに一人のパーソナリティーの交代ではなく、「ある時代の終わり」を告げているのかもしれない。TBSラジオでは昨年9月、土曜日の人気番組だった『永六輔その新世界』が終了して、『ナイツのちやきちやき大放送』に交代していました。番

組や司会者がコロコロ代わるテレビと違って、ラジオはなによりも「おなじみ性」が大切です。聴取者は番組企画やその日のゲストの善し悪しより、パーソナリティーの人柄がにじむ声に魅かれて、暮らしの一部のように聴き続けているからです。

日本で最もラジオ聴取習慣が高く、農業県でもある山形では「ラジオは大事な農機具のひとつ」と言われていました。暮らしの中に溶け込むのは、並大抵のことではありませんが、若く新しいパーソナリティーの活躍によって、新たな聴取者をラジオに招き入れてほしいと願っています。

ワイドFM開始で聴取率アップ!

もうひとつの転換期は、AMラジオがFM放送でも聴くことができるようになった、いわゆる「ワイドFM化」です。

すでに秋田、新潟、茨城、北日本、東海CBC、南海、長崎、南日本で始まっていたワイドFM。昨年12月からいよいよ首都圏のTBS、文化、ニッポン、そして中国でもスタートしました。そして今春、大阪や福岡、熊本、宮崎でも始まります。

さて昨年12月におこなわれた首都圏ラジオ聴取率調査(ビデオリサーチ)でS・I・U(全局聴取率)が、5・8%から6・5%へ0・7ポイントも上がりました。詳しく見ると、ひとつの局が増えたというより全体的な底上げがされました。そこから考えられ

るのは、ワイドFM化にあたって、各局が新聞などでの宣伝に力を入れたことが上げられます。これまで都市型難聴(高層マンション、家庭内電子機器の増加)で雑音が多くなり、ラジオを聴けなくなったAMフアン層が、ワイドFM化によって雑音なく番組を聴けるようになったことで、S・I・U増大につながったと推測されます。ただ、次回2月調査の結果を待たなければ、しっかり聴取者が定着したかどうかは即断できないでしょう。ぬか喜びは禁物です。もちろんワイドFMには山のように課題があります。前途多難と言っていていいでしょう。

さしあたって、ワイドFMを聴くことができる端末機器の普及(特にカーラジオへの搭載)が急務です。また財務状況の厳しい地方局にとつて、二液体制による送信費用の負担はジワジワと財務状況を圧迫していきます。

本来なら単なるAMとのサイマル放送ではなく、新たにFM向けの番組も作ってほしいと願うところですが、ただでさえラジオ制作の人員が減らされている現状では、それはないものなかりでしょう。

ワイドFM化を、たんに蛇口が一つ増えただけでなく、もっと美味しい水を作って流し新しい人たちに飲んでもらうチャンスと考える、ラジオ制作者が増えてほしいものです。ぜひ会員の皆さんにもFMでAM番組を聴いてほしい、その音質のクリアさに驚

いてほしいと願っています。(放送作家)

\*\*\*\*\*

住吉美紀の「Blue ocean」

「オトナとコドモの何でも相談室」

増山麗央

TOKYO FMで月曜日から金曜日、午前中9時から11時まで放送している「住吉美紀の「Blue Ocean」プロデューサーの増山麗央と申します。小学生低学年の息子が2人いる、ワーキングマザーです。

女性プロデューサーらしい視線の文章を...とのお題を頂きましたので、番組が毎週金曜日に行っている「オトナとコドモの何でも相談室」企画についてご紹介したいと思います。おもしろい。

「Blue Ocean」は、2012年4月スタート。もうすぐ番組がスタートして丸4年になります。20代30代の女性に向けて知的好奇心をくすぐるべくネタ選びをしています。ちなみに、F1聴取率は同時帯で占有率ナンバーワン!

元NHKアナウンサーのアラフォー住吉美紀さんが女性の悩みに寄り添うべく始めた「お悩み相談」企画が、いつのまにかリスナーがリスナーの悩みに答えるというお悩みコーナーに進化した企画が、「オトナとコドモの何でも相談室」です。

ラジオの鉄板企画ともいえる相談企画。この企画をはじめてそろそろ1年になるの

ですが、木曜日になると、番組ホームページにどつさりとお悩みが届くようになりました。届くメールを見ると世の中にどんな悩みが多いのか、よくわかります。

悩みの中で圧倒的に多いのは、恋愛にまつわる問題です。特に、20代中ごろくらいの男性から「好きな女性に気持ちを伝えたいのだが、どうすればいいか、告白する」とで友人関係が崩れるのは嫌だ」という、草食男子が草食女子に恋をする悩み。

「もう8年くらい付き合っている男性が、全然結婚する意志を示してくれないが、別れるべきか」というアラフォー女性の悩みが多いということがBlue Oceanリスナー層の特色と言えるでしょう。

そんな中、最近増えてきたのが「同性の友達を好きになってしまった。同性カップルについてみんなどう思っている？」というメールに代表するような、ジェンダーについての悩みです。

パーソナリティの住吉は、「異性でも、同性でも、好かれるのは人間として嬉しい」という考え。そんな感想を言うリスナーからも「好きな人に告白しないと健康に悪いですよ」「誰かを好きになってしまった」とはどうしようもないこと」など、応援メッセージが届きます。

また、「高校時代に男性が男性に告白して成功したカップルを知っています」「自分も同性が好きです。周囲にもカミングアウト

して一緒に住んでいます。渋谷区に住んでいます」「私の3歳下の妹も同性愛カップルです」という声も届きます。

こういうメッセージを見ると、最近では、旧来の性的役割分業に対しての変化が急激に進んでいると感じます。男性が家事責任を一方的に負うというカップルなんて、いまや少ないんじゃないか、LGBTの人たちがやつと声をあげ始めてきて、認知されるようになってきているのではないかと、肌感覚で思っています。

夫婦別姓問題や、女性の再婚禁止期間の問題などに悩んでいる方のメールを取り上げると、賛成・反対の様々な意見が寄せられますが、だいたいは容認派。時代の今の空気が良くわかります。

特に夫婦別姓問題に関しては「好きな人の名字を名乗るのは嬉しいが、銀行口座の手続きや離婚した時に面倒くさい。選択肢を増やすためにも、夫婦同性にするか別姓にするか選べるとなおうれしい」という意見が圧倒的です。そんなBlue OceanのF1レーティングの各局と比較した占有率はトップ（2016年1月現在）ですから、ある意味、首都圏のF1女性の意見代表という感じではないでしょうか。

さて、このようなリスナーの悩みにリスナーが答える、というスタイルが定着したのは最近です。今までのラジオは「対一

でトークをするという演出を施してきましたが、Blue Oceanの場合は、住吉が悩みの真ん中に居るという形が、なにか、一対一で悩みに答えるより、お悩みのパターンが増えるし、リスナーにも優しく感じられるということに、ある時気がついたのです。

このような他人の悩みに誰かが答えるという形式は、ソーシャルネットワーク「ヤフー知恵袋」や「発言小町」などにもみられる形ですが、その悩みに「声で仲介する」という形が出来るのはラジオだけかもしれません。そのくらい「人の声」を介することで、すべての悩みも優しく、とがったキツイお悩みもマイルドになるような気がしています。文字にするとキツく感じてしまうことも、なぜか、声に出すとそんなにキツく感じない。これが、「何でも相談室」に悩みが寄せられる原因なのかもしれません。そして、リスナーもラジオを聞きながらメールを書き、WEBで調べ物をする。

そしてSNSに書き込む。そんな全員マルチタスクの時代。いままでもラジオ演出の基本は「対一」でしたが、SNS時代のラジオ演出はn対n、人と人の仲介なのかもしれない。声で癒し、リスナーにも知恵を拝借し、コミュニケーションの仲介をするラジオのお仕事に係れているのは、しあわせなことだと最近しみじみ感じます。

音声コンテンツの種類も増え、セットインユースも長期低迷しているラジオ業界ですが、この「人の声に癒される」という効果がある限り、決してなくなりはないのだろうと思う、今日この頃です。

### （エフエム東京プロデューサー）

先輩・島地純さんの死を悼む  
「放送人の証言」から

#### 田中秋夫

昨年の7月、放送人の会事務局から「放送人の証言」の出版化に向けた校訂作業の依頼があり、ラジオ関係者数人の校訂を引き受けた。その中に文化放送の先輩であり、一時期私の上司だった島地純さんの証言があった。奇しくもその依頼を受けたのは先輩の訃報を聞いて間もない頃だった。

島地さんはラジオドラマで藝術祭賞を始め数々の賞を受賞する等放送界で活躍されたと同時に、牧原純のペンネームで演劇界でも活躍された人物である。証言を基に改めて激動の時代を生きた島地さんの人柄を偲んでみようと思う。

昭和元年生まれで若き軍国少年だった彼は浦和中から海軍兵学校に進み、昭和20年3月に74期卒の海軍少尉となった。B29を迎撃する為に開発されたロケット戦闘機「秋水」のテストパイロットも勤めたが、「秋水」は開発途上で墜落し殉職する隊員が相次いだ為開発は中止されたという。そ

の後特攻要員として千歳に配属され、ゼロ戦の飛行訓練に励んでいる頃に終戦を迎えたという。

戦後、就職に際して元海軍少尉は公職追放令があり公務員は無理だったという。

そこで外語大ロシア語学科に進んだが演劇に傾倒しロシア演劇の研究と翻訳を始めた。特に「ワーニャ伯父さん」等チェーホフ作品の翻訳に情熱を注いだ。エルミローフの「チエーホフのドラマツルギー」はそれまでのチエーホフ像を革命の預言者的存在に変え、後に映画のヌーベルバーグ監督大島渚、吉田喜重たちのバイブルとなった。ロシア演劇界から多くを学んだ日本の新劇界だったが当時はロシア語の専門家は少なかったという。その為、岡倉士朗や千田是也たちに重宝され劇団「ぶどうの会」の文芸部に入りにするようになった。

昭和28年に外語を卒業後、開局2年目の文化放送が社員を募集していたので応募し入社したが、演劇の仕事も続け一足の草鞋を履くことになった。入社後に配属されたのは営業部で、昼間はスポンサーを廻り、夜は新宿風月堂の2階で演劇専門誌「テアトロ」等の翻訳に取り組んだという。問題だったのは名前で、ロシア語を専門とする人物はアカというレッテルを貼られ易い。そこで演劇関係では牧原純のペンネームを使うことになった。その後営業部から制作部ドラマ班に異動となったが、そこにはN

HKをレッドページされた人物や地方局出身のドラマ職人等が集まっていた。彼は新劇界で培った人脈が役立ち、山本安英や滝沢修、小澤栄太郎等新劇界の重鎮たちにしばしば出演してもらった。小澤栄太郎はスタジオに現れた時に「演劇界にいる牧原と言う奴が君とそっくりだ」と言ったという。

昭和30年代はラジオドラマの全盛期で連続ものと単発を合わせると毎週15本ほどが放送されていた。その為スタッフが不足し、脚本は伊馬春部、大林清等の劇作家に依頼する他、安部公房、堀田善衛、椎名麟三、三島由紀夫等純文学系の小説家や谷川俊太郎、川崎洋たち詩人にも依頼した。さらに音楽は三善晃、芥川也寸志、武満徹、山本直純などに依頼したという。証言では制作に係わった数々のドラマについて語っているが、特に内村直哉の脚本による「沖縄」、安部公房の「棒になった男」、堀江謙一原作、川崎洋脚本の「マーメイド」等について語っている。

特に彼の最後のドラマ作品になった「戦艦大和」について詳しく語っている。このドラマは終戦20周年特番として1965年8月15日に放送されたもので、吉田満原作の「戦艦大和の最後」を川崎洋が脚色し山本直純が音楽を担当、出演者は鈴木瑞穂、芦田紳介、清水将夫という2時間15分の超大作だった。この作品を制作した意図について「私の誕生日は8月15日です

。19歳になった日が敗戦でした。戦後20年の終戦記念日の放送で戦艦大和を描くことで軍国少年時代と戦後の混乱期を生きてきた証を叙事詩的にドラマで表現したかった。多くの若くして亡くなった戦友たちへのオマージュでもある」と語っている。そしてこのドラマの効果音について「大和の主砲

である50cm砲の発射音をリアルに再現するために海上自衛艦に協力を仰ぐ等大変苦労した」と語っている。さらに「昭和40年頃にはテレビの普及によってラジオの役割が大きく変化し、ラジオドラマの時代が終わろうとしていた。空中戦の時代に大艦巨砲主義の戦艦大和が特攻出撃して最後を迎えたように、このドラマを自分の半生の総決算にしようと考えた」と語っている。

確かに私が入社した東京オリピンピックの昭和39年頃からラジオの編成は大きく変化しはじめて「生・ワイド・パーソナリティ」の番組作りが主流になっていき、ラジオドラマや録音構成は消えつつあった。島地さんはその後、編成局を離れ、新規事業の開拓を任務とする営業局開発事業部長に任命された。その頃に私も同部署に異動になったのだが、海兵出身者の凛とした姿勢を保ちながらも常に微笑を絶やさず「なにか面白いことをやろうよ」と部員たちに呼びかけていた。社内各部署から集められた部員たちは上司と部下という垣根をこえて議論を重ねる梁山泊的雰囲気の中、面白い企

画が続々と誕生した。その一つが「新宿メデアポリス宣言」で1970年当時サブカルチャーのメッカだった新宿をメデアとして捉え情報発信していくという企画でタウン誌「新宿ブレイマツプ」を創刊したり「新宿音楽祭」を開催したりした。島地さんの演劇人脈と包容力のある人柄が生み出した成果だったと思っている。

その頃のエピソードとして海兵74期の同期会「江鷹会」の仲間とハワイへ出かけて元米軍パイロットたちとパールハーバー近辺で親善ゴルフ試合を開催し、グラマン対零戦の地上戦を展開したという。島地さんは子会社の社長を最後に退職後再びチェーホフの翻訳を始め、牧原純の名前で「チエーホフ巡礼」二人のオリガ・クニツベル」等を出版している。

最後にお会いしたのは一昨年のゴルフ会だった。彼は赤い野球帽を被って現れたのだがその理由を聞くと「海軍兵学校では水泳が苦手な奴は赤い帽子を被ることが義務とされていた。87歳となった今ゴルフに自信がなくなったので赤帽を被ることにした」と語った。事実その日のスコアは惨憺たるものでハーフでリタイアした。訃報を聞いたのはその半年後で葬儀は無宗教の家族葬で執り行うとのことだった。今は亡き島地さんの柔和な面影を思い浮かべると何処か遠くで「海行かば」が聴こえる気がする。合掌 (放送人の会理事)

## 第40回 名作の舞台裏

### 外科医 有森逸子

(1990年4月〜6月放送 NTV)

日時 1月23日(土) 13時〜16時

場所 イイノホール

ゲスト 三田佳子(出演) 井沢 満(脚本)

石橋 冠(演出) 川原康彦(制作)

司会 渡辺紘史(放送人の会)

会場に近い日比谷公園のそばの歩道に早咲きのボケがピンクの花をつけていたが、大寒、寒い日である。そのせいか会場入りは6割程度である。



司会・渡辺紘史氏

**渡辺** ゲストの方の最近の活動ですが、石橋さん初めての映画監督作品「人生の約束」がたまたま公開中です。富山県新湊の曳山祭りを舞台に男の友情を描いてスケールの大きい作品だと聞いています。石橋さん、テレビと映画は違いますか？

**石橋** 大きいスクリーンと大きい音に興奮しましたが、撮影現場は機材もスタッフも同じで、変わりません。公開にあたっての宣伝活動は大変でした。  
**渡辺** 三田さんは昨年「花燃ゆ」で上州のおかみさん役で出演でした。また12月の舞台でも大変でしたね。

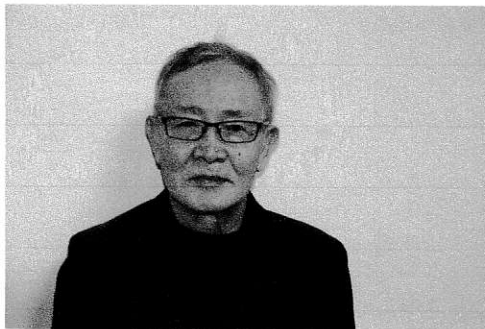


三田佳子氏

**三田** 20何年ぶりの大河ドラマです。逡巡しましたが、スタッフの方と井上真央ちゃんに是非と言われてやらせていただきました。舞台は「かたき同士」。橋田寿賀子先生の脚本、石井ふく子先生の演出、藤山直美ちゃんと共演。大変なセリフ、大変な動き、大変な上演回数を日本全国でやって、やっと終わったと思ったら、シアター・コクロー

ンで「スーベニア」をやることになりました。騒音の歌姫と呼ばれた音痴で人気抜群のオペラ歌手の話で、素敵な台本です。  
**渡辺** まず企画のいきさつからお聞きしましょう。

**川原** この枠、「土曜ランド劇場」は視聴率では苦戦していて、度胸をきめて勝負したのが「有森逸子」。井沢さんのホンには前から魅かれていて、何度も頼んでいますが、三田さんはなかなかスケジュールが取れない。やっとスケジュールが空いて、やれることになり、起死回生、忘れられない作品になりました。先日26年ぶりにみましたが、ホンがいい、三田さんがいい、演出は牙えわたっている。感動しました。  
**井沢** 当時、主役の名前を番組タイトルにするのは珍しかった。私の夢の中に出てきたときは有森逸子だったのですが…



石橋冠氏

**石橋** 逸子ではどうも牙えない。逸子にし

て、メスで切ったように赤い線を名前の上に描くレタリングにしました。

→ドラマの舞台は桜が丘総合病院。設備の整った立派な病院で、井原外科部長(二谷英明)が新任の外科医の到着を待っているがなかなかこない。そこへ八丈島からヘリによる緊急搬送の患者が来るとの連絡があり、一方近所でバス事故があり人が救急車で運ばれてきて病院は騒然となる。その中にヘリが到着。ヘリから患者に付き添って有森逸子(三田佳子)が降りてくる。

**井沢** あれは歌舞伎で主役が花道から登場するような感じを狙った。客がまだかまだかと待っていると意外なところから主役が現れ、「待ってました！」と大向こうから掛け声がかかる。

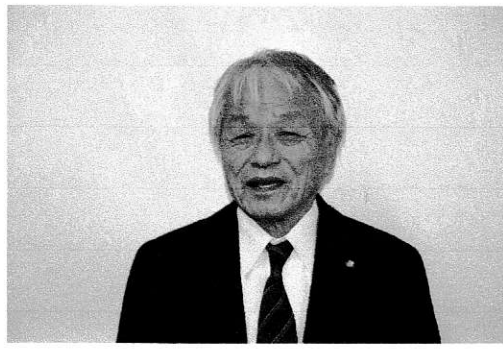
**川原** リアルなドラマにしたかったので嘘っぽいのはいやだ、どうかなと最初は思いました。しかし実に話の辻褄があっているんですね。八丈島にいたのは釣りに行ってたから、バス事故のため周辺の道路は閉鎖されている、子供の病気がこう、と納得してしまいました。

**三田** それまで内科医はやりましたが、外科医は初めてで、三鷹の日赤病院へ見学に行きました。いろんなタイプの方がいらして、おとなしい人、迫力のある人…、参考になったのはぶつさらぼうで、宝塚の男役みたいな人で、趣味がオートバイとタバコ。それが有森逸子のモデルです。診察が終わると白衣の前をはだけて聴診器を二つに折



つて首にかけられるスタイルを学びました。三田佳子がオートバイ？ラッタッタの間違いないじゃねえか？」と言われました。タバコも吸えないんです。しかし、当時は女性の自立、とんがっている女性像が求められていましたから。

**渡辺** 86年に男女雇用均等法が施行、土井たか子さんが社会党の党首になり、89年昭和から平成に変わり、ベルリンの壁が崩壊、91年にソ連崩壊という激動の時代です。



川原康彦氏

**川原** 三田さんの見学は熱心でした。ゴグルの上に絆創膏を十字に貼ってゴグルを固定したのは三田さんの提案です。ゴグルが動くメスの手元が見えなくなるからです。ゴグルに血がとんで拭くのも三田さんの提案でした。

**三田** 精密な人体模型を作っていただけで内臓も非常にリアルで、監修の医者の方の前で切ったり、縫ったりするうち「有森先

生サイコー！」と褒められるようになりました。

「有森冴子は元夫（夏八木勲）とその妻（泉ピン子）が来院しているのをみかける。妻は妊娠していて産婦人科、夫は内科で胃潰瘍との診断だが、実は重症の胃がんで肝臓にも転移がある。担当の内科医岸田洋（岩城滉一）は有森に外科手術を依頼する。動揺する有森、事情に気付いて有森に食ってかかり、懇願する妻。緊迫した長いシーンの繰り返しがある。

**石橋** 今ならもっと細かいカット割りで撮るでしょう。若くて体力があつたのですね。ドーンドーンと大きなカット割りです。いる。スタッフの勢いを感じます。

**川原** 二大女優対決と騒がれました。

**三田** あの頃のピン子ちゃんは可愛かった。負けてなるものかという芝居で、本人は勝ったと喜んでいました。私は淡々と受けの芝居ですが、編集が終わってみると、勝っていたのは私だった。（笑い）

**川原** ピン子が「夫が苦しむのは見てられない。いずれ死ぬのなら安楽死させてやってくれ」と懇願する。有森冴子は「あなたが苦しんでしょ。だから殺してくれと言うんですよ。ご主人は頑張っています。あなたも頑張りなさい」と言います。あのセリフは凄いいセリフですね。

**石橋** いのちについてのセリフもそうです。「世界では4万人が飢餓で死に、核戦争に脅えている。私は10年外科医をやって10

00人の患者を診るのがせいぜいですが。命について私がやれることはせいぜいそのくらい」。医療への強いメッセージだ。

**渡辺** このドラマは、女性職業人をモデルにしたさきがけで、昨年ヒットした「ドクターX」の企画のヒントにもなったと聞いていますが、その時代の政治状況も背景になっていますね。

**井沢** 私は個人的な政治信条は脚本の中に入れないことにしているのですが、泡のように浮かんでくる当時の時代の問題意識は反映しています。

「着任早々強引に手術をした八丈島の子供はすっかり元気になり、病院の中を走り回り、有森冴子の元夫（夏八木勲）と仲良くなる。冴子は元夫の胃がんの手術を行い、一時は「おいしい」と食事をし、庭のある自宅に帰宅するが、やはり容体は急変し、病院で八丈島の子供に手をとられて息絶える。妻（泉ピン子）は迷った末、子供を産む決心をする。

**石橋** 井沢さんが「ドラマは対立、葛藤、非日常」と言ったことが印象に残っていますが、このドラマは設定が見事で納得してしまふ。べたべたしないクールな語り口がいい。

**井沢** 若いときはとんがっていましたね。「有森……」の時に脚本家として一番成長した時期だと思います。それからの成長は少しずつですが……



井沢満氏

**三田** 新しいものをやるときはいつも怖い。いつも不安です。集中力をもって、みんなで作って乗り越えます。

**井沢** 脚本家として三田さんに教わったのは、どの回も一度は計算外の「え？」という芝居がある。私も負けずに1シーンは新しいものを書くことにしています。

**三田** アスリートがいのちを削るようにならざるに、じぶんはどこまでできるか挑戦していたいと思います。肌をさらしての官能のドラマもやりましたし、紅白の司会もやりました。次は何がやってくるのかわくわくしています。

終わって会場では「面白かったね」「面白かった」の会話が聞かれ、三田佳子さんは何人かのファンに囲まれ、なかなか放してもらえなかった。

## いろはに時代劇 ～その拾六～

### 菅野高至

あと少し、朝ドラ「純ちゃんの応援歌」(88年10月放送)のことを書く。藤山直美さんが演じる戦争末亡人の牛山ももには桃から生まれた、腕白な息子・金太郎がいる。金太郎は後半、子役から大人になる。ある日、メイク前のモニターを真剣に見ている、やや長髪の若者がいた。風貌が金太郎役の子役、新田勉君によく似ている。ガキ大将の金太郎が大人になると、こんな感じの青年になるんだなと感心していると、そこへ高嶋政宏さんが現れて、「弟の政伸だが、今日一日スタジオで見学をしているので宜しく」と紹介される。聞けば、まだ学生で、映画監督志望だと言う。

兄貴と違つて二枚目では無い。眼差しが少しキツイ。その危うさがまた良い。彼を金太郎で抜擢したと思つたが、「またまた2世をキャスティングするのか!」と揶揄する声が、何処からか聞こえても来ると。考えあぐねて、サブ・デスクの女性スタッフに相談する。高嶋兄弟を共演させるのは、いかにもイメージで恥ずかしいよね、と。「良いんじゃない、彼で。金太郎にソックリなんだから、大丈夫よ」と、あつさり答える。この、彼女のひと言が決め手になる。早速、東宝芸能のマネージャー有馬さんに連絡を取る。彼がドラマに出演する意志があるか否か、確かめて欲しい、と。すると、役者になるつもりは無いが、映

画作りの勉強の為に出てみたい、それで良いだろうかとの答だった。「どうぞ、それで構いません」と返事して、著作権部への出演者の登録も兼ねて、念のため、彼に履歴書を書いて貰う。この時、有馬さんと僕が思つていたのは、「食と役者は三日やったらやめられない」という諺だった。勿論有馬さんは東宝芸能という会社のことを考へ、僕は番組のことだけを考へていた…。

数日後、届いた履歴書の「特技」の欄には「脚本」と記されていた。お若いのに、プロに向かつて良い度胸ではないか、さすが高嶋家のジュニアだと思つた。かくして、俳優・高嶋政伸の初日が、大阪放送局のリハーサルルームで始まる。大人になった金太郎初登場のシーン、演出は佐藤幹夫だった。まずは本読みからだが、政伸くん、やはり最初は声が出ない。立ち稽古に移る。相手役の直美さんの目を、まともに見られない。何より羞恥心が抜けないのだ。同じシーンを、何回となく繰り返す。声が出て動きが自然になるようになると、演出の「もう一回」「もう一回」と、静かな声が続く。

感動したのは、藤山直美さんの芝居力と人となりだった。相手が素人の新人でも、決して稽古の手を抜かない。相手がとちつても、直美さんの台詞は決してぶれない。テンポも崩れない。嫌な顔ひとつ見せず淡々と稽古を続ける。「負けるな、息子!」臆するな、息子!、直美さんの無言の励ましが続く。それは、不器用な息子の特訓に

辛抱強く付き合ひ、役者のイロハのイを教へようとする母親の姿であった。

尤も、母親と言つても当時の直美さんはまだ30歳だった、まさしく彼女は役者・高嶋政伸の産みの親だったのである。

だが、こんな彼女にも、実は悩みがあったのである。直美さんは、朝ドラの出演交渉にあたって、すんなり出演OKとはいかなかった。当時の直美さんは役者が続るか否かで悩んでいた。天才の喜劇役者、藤山寛美を父に持つがゆえの悩みであった。幼い頃から子役として舞台に立ち、天才寛美の娘と言われて、どう演じようとも、どこか寛美に似てしまう自分が好きになれないでいた。そもそも、家に居着かず、借金に追われる破天荒な父親とは、無関係でいたいと思つていたのである。僕らの朝ドラ出演のオファーに対して、中途半端な気持ちで出ては、共演者に迷惑がかかるし、お客さまにも失礼だから、少し考える時間が欲しいと言ってきた。

「お待ちします」、そう答えて待つこと暫し、ようやく出演OKの返事が来る。どこで彼女が折り合いを付けたかは分からないが、僕は勝手に、高校野球に関わりのある物語だから、出演を決めてくれたのだと思つている。彼女は高校野球と王貞治の大ファンだからだ。

朝ドラ出演から2年後、90年5月、寛美さんが亡くなり、父親の死をきっかけに、役者で生きることを迫られ、ついに彼女は覚悟する。役者で生きる、と。舞台上に立つた彼女は、父親の舞台をちゃんと見ておけば良かったと後悔する…。

彼女の舞台で秀逸だったのは、勘九郎さん(十八代目中村勘三郎)と組んだ、喜劇「浅草パラダイス」シリーズである。初演が97年2月、新橋演舞場の新派公演で、金子成人・作、久世光彦・演出『浅草慕情』なつかしのパラダイス』である。新派の一座に、ゲストで直美さんと勘九郎さん、柄本明さんの三人が参加し、若い24才の中村獅童と寺島しのぶも出ていた。

丁々発止! 勘九郎さんと直美さんとは、もに恰好の相手を得て躍動し、直美さんはまごうこと無く、喜劇役者、藤山寛美の娘であった。幕間、ホンを書いた金子さんに会つ。「いや、面白いね!二人は」とただただ感心していた。

戦後70年にちなんだ、昭和最後の日の話から、つい、朝ドラの役者の話が長くなつた。本題は、「はやぶさ新人御用帳」の役者たちである。

隠居した岡つ引き、鬼勘(六戸錠)に、利発な跳ねつかえりの小かんという娘がいる。女ながらも、小かんは岡つ引きになりたいと、新八郎の後を追ひ、手助けをするのだと江戸の町を走り回る。小かんには、荻野目慶子さんがよく似合う。そう思つて、93年の春、荻野目慶子さんに出演交渉をする。事務所のマネージャー氏は是非やらせたいと言のだが、本人が踏輪を踏んで来た。恋人の自殺から3年弱、心中話が出て来る捕物帳は、まだ避けて通りたいと言つたのだ。口説くに如かず、マネージャー氏に頼み込んで、荻野目さんに会うことになる。(つづく)

第18回放送人の世界

相田 洋 (人と作品)

日時 12月11日(金) 18時半〜21時

12日(土) 13時〜18時

場所 上智大学 10号館講堂

聞き手 今野 勉 (放送人の会会長)

上松くみ子 (上智大学・学生)

上映作品

「解体〜興安丸の一生」

「核戦争後の地球」

「電子立国 日本の自叙伝」

「移住〜31年目の乗船名簿」

「母と歩いた道」

質問する役割で、よく見、よく聞き、よく理解しての的確な質問をした。

相田洋さんは1936年旧朝鮮前羅南道生まれ。旧満州で育ち、戦後引き揚げ。1960年NHK入局。上映された作品のほかに多くのドキュメンタリー番組を手掛け多くの受賞歴がある。

11日の1本目は興安丸の解体を描いたドキュメンタリー。興安丸は満州国が生まれて急に乗船客が増えた関釜連絡船のために長崎三菱造船所が作った船で、朝鮮、中国からの強制連行、戦後の引き揚げ、シベリア抑留兵の帰還などさまざまに使われた歴史を持つ。保存の運動もあったが、解体と決まると聞いた途端、相田さんはどんな番組にするかは考えず、とにかく記録するのだと解体現場の広島県三原に行つて撮影を始めた。番組はさまざまなエピソードと解体作業の映像がフラッシュバックされて進行する。厚い鉄板や太い配管がバーナーで焼き切られ、重機で壁がはがされる迫力のある映像をみているうちに、小さくなった鉄の破片の一つ一つが物語を持つているように思われてくる。相田さんは「解体作業の映像は面白い、それだけで番組になる」と知っていたのだろうか、興安丸の解体と聞いて「これは番組になる」と思う直観力は凄い。2本目は「東京上空襲」。引退

して取材を拒むルメイ將軍への粘り強い取材が印象的だった。

12日は「核戦争後の地球」「電子立国日本の自叙伝」「移住31年目の乗船名簿」「母と歩いた道」。どれも非常に面白かった。「核戦争」では核爆発で破壊され炎上する映像をガラスに写真を焼き付けてアルコールと火薬を使ってそれらしく見せる特殊技術を撮影現場の映像を使つて説明したが、安価にできる美に巧妙なトリックで、今野勉氏が感心していた。「移住31年」はあるぜんちな丸でブラジルなどに移住していった人たちのドキュメンタリーで10年目、20年目の節目で追いかけた作品があり、その続編である。この間いろんな人生があり、ブラジルでニンニクの栽培で成功していた人が中国から安価なものが入つてきて経営が破綻、妻を射殺し自分は自殺未遂という事件を起こしている。船、国を離れるということへの相田さんの深い思いが伝わってくる。相田さんは、父親がフィリピン従軍で母親と子ども3人が満州に残され、多くの苦難を経て帰国するのだが、「母と」はその苦難の道を70年後に辿つた記録だ。相田さんはあつたとき、国に捨てられたと言う。その思いがすべての作品に通底している。

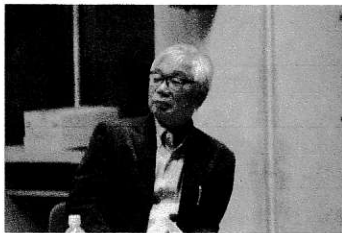
シンポジウム終了後は四ツ谷駅近くのピルの地下「南国亭」で例年通り学生と懇親会。学生たちは聞き手が上松さんだったせいで私たち放送人の会のメンバーに対しての距離を近く感じてくれたようだ。楽しい話が多かった。



相田洋氏



聞き手・上松くみ子氏



今野勉氏



学生との懇親会スタッフ

## シンポジウム

### 戦後70年 テレビは何を伝えたいか 〜被害と加害のはざままで〜

共催・放送人の会 明治大学「社会思想史

研究会

日時・2015年12月6日(日)

13時〜17時

会場・明治大学和泉校舎図書館ホール

講師・生方卓(司会・明大准教授)

高橋哲哉(東大大学院教授)

今野 勉(当会会長)

金平茂紀(会員・TBSキャスター)

桜井 均(会員・立正大教授)

参加・約50名



生方卓氏



高橋哲哉氏



今野勉氏



金平茂紀



桜井均氏

はじめに、催しの趣旨を今野会長が、「この夏、安保関連法案の国会審議状況に当会有志名で反対声明を出した際、会として先の△戦争Vを放送がどう扱ってきたかを振り返るのも必要ということになった。

論点を△加害と被害Vに置いたのは、歴史認識、問題の争点であり、日韓中テレビフオーラムの課題でもあるからだ」と説明した後、生方卓氏が司会、桜井均氏がプレゼンター役に進行しました。  
桜井氏は先ず、安倍首相の△戦後70年談話Vの「あの戦争に関わりのない世代に謝罪の宿命を背負わせてはならない」のくだりと、評論家・加藤周一氏の「国の文化を継承する以上、将来の戦争の可能性には世代を問わず責任を負うことになる」発言を対比させて論点を明示した上で、ドラマ『私は貝になりたい』(昭33年、TBS)『ある玉砕部隊の名簿』モンテンルパへの追憶』(共に昭34年、NHK「日本の素顔」などBC級戦犯裁判を手始めに、膨大な特番群の中から加害と被害のはざまを衝く作品のさわりの映像を整理し、戦争の不条理、日本的論理、責任問題を浮かび上がらせました。この夏の特番からは、『書きかえられた沖縄戦』(NHK、E TV特集)、『戦時性

士たちの遺言』(日テレ、NNNドキュメント)など加害検証への代表作が取り上げられ、留意点の一つとして桜井氏は「ドキュメンタリーにも(ドラマの場合と同様に)カタルシスを意図する傾向があるが、△戦争Vに対しては事実の究明に徹することが肝要」と印象を述べました。  
パネリスト各氏は、「NHK、民放共に結構ガンバッテ来たことがわかる」と制作現場の努力を改めて評価しつつ、高橋哲哉氏は「1990年代以降タブー化の圧力が強まり自主規制の傾向が見える。しかし、個人体験の伝承に時間的限りある今、番組化は社会的表象(記録)として残す大切な作業と心得るべきだ」と強調、

今野勉氏は「元兵士の加害証言は遺言の重さがある。一般国民の執狂や同調の意識や行動も加害の側面があるが、事例や証言の取材はむずかしい。この深層にも光を当てないと△戦争Vの本質も見透せず、反省も中途半端となる」と指摘  
金平茂紀氏は「戦争の実態は加害と被害の区分けが微妙。加害にぶれると、自虐史的観の批判を呼び、圧力もあつてつい、自主規制に逃げがちだ。ここを解明・確認しないままでは、不戦の未来につながらない」と報道現場の現在の苦心を吐露。  
次いで論者たちは、体験・知見を交えて多面的に問題点を論議、中でも天皇制をめぐる責任論ではさまざまなエピソードを挙げて、日本人の意識に根付く伝統的な不可侵のカリスマ性も炙り出すなど、会場を傾聴させました。同時に、近頃自立つ歴史修正主義と国家主体意識の復活を危惧、国民の側の大勢順応傾向にも懸念があらわされました。  
会場に時間の制約があつて議論は尽くせませんでした。参加者からは「率直な議論が貴重で、勉強になった」と賛辞が寄せられ、一方で「それにしても参加者が少ないのが残念」との声も上がりました。

(文責・鈴木典之)



# 第54回放送人句会

平成28年1月12日(火) 於：赤坂・表屋

出席：伊藤視郎、荻野慶人、佐々木光政

新村もとを、西川阿舟、橋本きよし、

林備後、深尾一化(初参加)、堀川とんこう、

森治美(出席10名)

不在投句：山県ほん太

兼題：双六、初雀、雪、仇役(業界用語)

初雀ひかり撒きつつ降り来る      もとを  
 降る雪や宿場女郎の無縁墓      ほん太  
 冬ドラマ総理の息子は仇役      阿舟  
 先づ一羽こゑより来る初雀      備後  
 しんしんと雪降り積る逢瀬かな      視郎  
 敵役斬られて掴む寒椿      とんこう  
 誰やらむ雪踏む音の遠さかる      とんこう  
 たかむら  
 筆を群れて抜け来る初雀      もとを  
 ★  
 初雀遠く耳にし床に着く      もとを  
 ふるさとの京都に上る絵双六      きよし  
 振り出しは三途の渡し絵双六      備後  
 敵役鼻水する立ち廻り      とんこう  
 かまど  
 雪雲は暗し竈に湯がたぎる      きよし  
 集団で来てかまびすし初雀      阿舟  
 雪の声産声聞きて父となる      治美  
 初雀居一礼し去る仇役      もとを  
 風雪となり灯台に遠き街      きよし  
 早じまひ雪夜に恋の予感せり      光政  
 暖冬と聞いて焦がるる雪景色      慶人

雪浅く昨日の罪の見え隠れ      とんこう  
 敵役決まらぬまゝに初雀口      備後

初雀と思ひきや初四十雀      阿舟  
 しじみから

敵役アストラカンの外套で      視郎

初春も仇役から始まりぬ      治美

双六の賽の彼方のラスヴエガス      備後

おばあちゃんずるして上がる絵双六      視郎

悪役と一枚目と行く初詣      備後

敵役長身瘦躯悴めり      視郎

初雀狭庭の枝がちゆんと揺れ      一化

吹きすさぶ雪の煙幕視野皆無      光政

一月の川に沈めり仇役      視郎

仇役鏡も揺れる初笑ひ      慶人

幕開けば大川端の雪の音      きよし

参詣の列横切れり初雀      とんこう

積む雪や記憶は時を溯り      もとを

双六をわざと牛歩の八十路かな      慶人

一羽来てまた来て幾羽初すずめ      ほん太

北に帰る友のタクシー雪もよひ      きよし

わらくと庭木は降る初雀      備後

諍ひの後の心に積もる雪      一化

降る雪に路地を照らして赤提燈      もとを

## 次回放送人句会

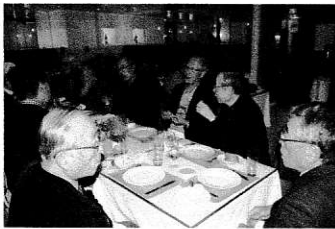
○平成28年3月8日(火) 18時頃から

○赤坂・表屋(投句 Fax:03-3586-0056)

○兼題：春塵、葦(すみれ)、菜飯、使ひ回し(業界用語)

## 放送人の会忘年会スナッフ

12月19日(土)  
 於：アン・カフェ



# 会員名簿

2016.2.12 現在

【あ】 藍澤幸久 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子  
石橋映里 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子  
井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭  
【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田昌宏 大西康司  
大野秀樹 大原れいこ 岡弘道吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野暉 荻野慶人 尾田晶子  
織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤宏次  
金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳  
河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由孝 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂  
隈部紀生 倉内均 倉澤治雄 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山帥人  
近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰  
佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐野有利 澤田隆治 沢田隆三 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一  
志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重暉子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則  
杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二  
【た】 高島秀之 高田宏 高橋練 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広  
田原茂行 玉城朋彦 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂  
鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暎子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也  
中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵  
中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之  
【の】 信井文夫 延江浩 【は】 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子  
藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一  
松平定知 松前洋一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋  
宮川鑛一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門倉昌彦 【や】 八木康夫  
矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世  
【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

## 計報

秋田完 2015年11月24日没

HBCラジオ技術、テレビ東京技術、テレコムジャパン  
を経てATP専務

鈴木道明 2015年12月24日没

TBSで第2演出部長、編成局次長、審査室長。作詞作曲家。  
マスターズ水泳で80歳の世界記録を樹立。「放送人の証  
言」に証言がある。

## 編集後記

▼例年1月に新春号、3月に放送人グランプリのための下馬  
評座談会を掲載する号を発行していたのですが、下馬評座談  
会の発行を早くして欲しいとの要望が強く、合併号にして2  
月発行になりました。おかげで分厚いものになりました▼こ  
のところ会報はだんだん分厚くなる傾向で、そろそろ長編の  
別冊企画を考え、会員の皆さんの寄稿を呼びかけようかと編  
集部で相談していたところに前川さんからの渾身の労作が  
持ち込まれました。どうぞお読みください▼財政上の問題も  
あり長編企画は1年に1回程度かと思いますが皆さんも考  
えてください(想)▼ドラマの巨匠・石橋冠さんが映画の初監督  
に挑戦したと話題の『人生の約束』が封切られたので早速観  
てきました。男のロマンと郷土フスタルジーを富山県新湊の  
伝説「曳山まつり」に結びつけ、人が心の芯でつながる  
ことの意味を問う力作です。話柄の小気味いい緊張の持続と  
目の覚める映像が感動を呼びますが、筆者には「二本だけ映  
画を撮りたい」と意気込んだ監督の志の熱さがシーン毎に胸  
に響いて、途中からなぜか涙が止まらなくなりまして。多分、  
深い共感の快さで老いの涙腺がゆるんだのでしょうか。ドラマ  
のカタルシスに飢える成熟した大人の皆さん、心が洗われ血  
が若返るのは必定。こゝ二見を勧めます(典)

自分で自分が生きる時代は選べないが、自分が時代とどっかかわるかは選択できるのではないか

—メディア状況の中の「放送人の会」—

前川英樹

2015年、「放送人の会」はいくつかのことを経験し、またいくつかの企画を実行した。いずれも、「今、放送人であるとはどういうことか」、「放送人は、今何を考えなければならぬのか」ということが問われるものであった。

そのときに考えたこと、継続的に考えてきたことを、ノートした。また、以前書いたもので「今に関わる」ものを引つ張り出して切り張りしてみた。

こうして、私なりに2016年の入り口を考えた。

2015年は政治とメディアの関係が、緊張を増した年であった。2016年はさらにその度合いを強めるであろう。「放送人の会」として、この1年間の意味を捉え返しておくことは、今後の私たちと時代との関係を考えるために欠かせないと思う。公私にとつて「放送人の会」とは何か。誰のためにはなく、へ私のためにノートしておきたい。

I. 放送人の会「安保法制に反対する有志の声明」・私的総括

II. 放送人は「放送法」の現在の意味を問うべきか

III. では、「放送は規制の外に出られない」とはどういうことか。

IV. 状況の劣化と制作者にとって楽な時代などなかったの交点・・・文化で政治を撃てるかシンポジウム「戦後70年 テレビは何を伝えたく被書と加書のはさまで」

V. 国家と個人「放送人の世界相田洋人と作品」―私たちは、問うべきことを70年間問うてこなかったのではないか―

VI. 広河は私に確認させてしまった、「サボるなよ」と。「広河隆一人間の戦場」を観た―

VII. 戦後の終わりのアポリア―「戦後入門」(加藤典洋)を読む―

VIII. 取り敢えずのまとめ

―2016年の公私のポジションは何処か―

\*. テレビ論についてのメモ

I. 放送人の会「安保法制に反対する有志の声明」・私的総括

\*. 「声明」及び「声明」についての会員の意見、経緯については以下を参照

<http://nosoin.com/a-blog/special/entry-501.html>

「放送人の会」の名前で、状況との関係を外的に意思表示したのは、「有志」の名前とはいえ初めてのことであろうか。この「声明」は「声明」そのものより、会員が個人として

「声明」どう向き合ったかということに興味があると考ええる。

7月理事会で「声明」についての提案があり、これを踏まえ、それよりも会として「テレビは戦争をどう伝えてきたか」という趣旨のシンポジウムを開催すること、そのような「開かれた場」の設定こそ会としてありうべき行

為であろうということが合意されたのであった。しかし、そのうえで「やはり会としての声明」を強く求める意見が提起され、会員の意思表示について会としてどのように対応するかという意見交換を経て、へ「有志の声明」十会員個人の意思表示という形が選択された(9/12)。「有志の声明」が出されたこと、そしてそれについての会員の意見の集約が、乱射的々とはいえず会員に共有されたことは大きな経験であったといえるだろう。

以下は、これについての個人的総括であり、また会としての議論の意味を記録しておくべきだと考えて書いたものである。

「有志の声明」と放送人の会々についての私的総括

1. この「状況」において「会」のあり方を考えるという意味で、この提案の意味があった。この提案は、時代がすでに私たちに問うていることを明示したのであり、このことを評価する。

2. 会員に向けての問いかけに付された「基本的考え方」(会長明文書)は、今後も会として一つの原則足り得るであろう。

3. 但し、「会員の意見」として、へ放送人の会が、「自由な意思表示を行う」ことのできる会だ、というのはその通りだとしても、自由を抑圧する意見や考えを主張する「自由」、論理的、科学的に通用するはずのない妄言を振りまわす「自由」は、わが会では絶対に認められないものだということだけは、はっきりさせておかなければならないという指摘があった。併せて、「他者の人格を否定する発言」も許されない。それは、放送人としての自己否定である。

4. 個人の意思表示はその人によつてのみ代表され、その人の責任において表明される。今回の「声明」の公開が、そのように構成されたことは合理的であったと考える。

5. また、同時に「賛同しない自由」あるいはより広く「意思表示しない自由」もありうる。

6. 「踏み絵を踏ませるな」という指摘があったが、これはまことにフリケートな問題である。「踏み絵は」声明への賛同かどうかに関わるのではなく、時代そのものが私たちに問うているものである。「踏み絵を踏まない」自由はそれぞれのもだが、それは他者から求められているのではなく、自らに問うべきものである。

7. そのうえで、「声明」に関して多様な意見が提示されたのは良かったと考える。もし、

それが一色に塗り上げられたことを考えると、たしなむべき思いである。

8. 「声明」についての意見集は、会員の意識の乱反射であり、そのドキュメントである。

9. 「声明」の公表というアクションをより効果的にすることを求めるのであれば、「会」を超えた広がり、訴求力を求めてしかるべきである。運動とはそういうものである。例えば、SEAL's of STUDENTであるように、「放送人の会」の放送人への英語表記 BROADCASTERS の B を採って BEALS という形態はあり得るかどうかが、運動論・組織論として考える意味はある。但し、これは「会」としての選択ではない。

10. そのうえで、状況におけるこの会のあり方とは何か、そして「放送人」とは何か、という問いはそのまま残されている。なぜならば、時代そのものを私たちは選べないが、時代々にどのように関わるかは私たちが選択できるからだ。以上

「補遺」私は安保法制審議中に2度、国会前に行った、自分の立ち位置を確かめるために\*。参院議決当日、国会前道路は装甲車に取り囲まれて人々は狭い路上に押し込まれていた。国会前道路も、国会構内も、人々に解放されるべきだと思つた。選挙も代議制も民主主義の形式であり方法であるが、それは民主主義原理そのものではない。人々が政治空間に直接参加することは、原理的に排除されてはならない…などと思いつつ、1960年6月のことを思い出していた。あの南通用

門「も閉じられていた。

そして、SEALDs 人もし、この国に希望というものがあるとしたら、それは彼らだろ」

\* 「放送人ブログ」前川日記2015.9.1  
国会前にも行ってみた・・・自分の立ち位置を確認するために。」

<http://hosojin.com/a-blog/makawa/entry-503.html> 「放送人ブログ」へスベシャル「1960年6月のことだ」  
<http://hosojin.com/a-blog/special/entry-482.html>

## II. 「放送法」の現時的意味

この1年、政府・与党による放送への介入干渉が続いた。その焦点は放送法4条である。BPOは、こうした放送への圧力を憂慮し2度にわたって批判している。また、BPO委員である枝氏は自身のブログで放送法制定の経緯を踏まえ、その法の趣旨と論理構成についての論文を掲載している。実に丁寧な放送法を読み解いている。

一方、放送界そのものからは「BPO(意見)を尊重する」との表明はあるものの、自身による放送法の意義と放送事業者としての対応について、明確な意思表示はない。これは、まことに不可思議な事態である。まず、放送事業者が政府・与党の干渉に直接的に抗議することにも放送法とは何のための法律か、放送局の存在理由は何か、免許制度のもとでの言論表現の自由は如何に実現されるべきか、等々について語らなければならない。放送局経営のそれは原点であり、経営哲学である筈だ。

それは、放送人にとっても同様である。

公権力あるいは国家という存在との緊張感を喪失したところに放送人の立ち位置はない。

というようなことを思いつくあるときに、読売新聞に意見広告として、TBSの「ニュース23」コメントーター岸井氏批判が掲載された。直感的に、戦前の国体明徴運動、「天皇機関説」への論難を思い出した。ここでも放送法4条が論拠にされている。読売新聞は「意見広告」なのだから、編集方針とかかわりないであろうが、しかしそれは新聞社としての経営理念の問題であろう。

TBSは「局に寄せられる意見の一つと受け止めている」という認識のようだが、それは違う。これも局としての経営理念、局の存在理由に関わる問題だと認識しなければならぬ。そうでなければ、局として論外の対応になる。仮に「4月の改変期のキャスター交代は予定通り」だとしても、こういう状況下では力技でも半年先に延ばしたらいい。それが、局のプライドであり、分かりやすく言えば意地というものだ。

・・・どこまで書いたところで、事態は次のようになった(2/15)。  
岸井氏はTBSと専属契約を結び、同番組(「ニュース23」)を含むTBSのさまざまな報道、情報番組に随時出演し、スペシャルコメントーターとしてニュース解説や論評を行うという。ウーム、コレってどうなんだ。岸井氏の意志だとすれば、なかなか強力、それともなかなかの知恵者がいるということか。

## 第2章 放送番組の編集等に関する通則

(放送番組編成の自由) 第3条 放送番組は、法律に定める権限に基づく場合以外に、何人からも干渉され、又は規律されるべきでない。

(国内放送等の放送番組の編集等)

第4条 放送事業者は、国内放送及び内外放送(以下「国内放送等」という。)の放送番組の編集に当たっては、次の各号の定めるところによらなければならない。

- 一 公安及び善良な風俗を害しないこと。
- 二 政治的に公平であること。
- 三 報道は事実をまげないこと。
- 四 意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること。

放送法第2章番組編集準則第3条及び4条の構成が「事業者による自律」を趣旨としていることは、これまで行政も含めて放送関係者にとつての共通認識<sup>1)</sup>、常識<sup>2)</sup>であった。特に、4条二項「政治的公平」とは、公権力からの自立を意味している<sup>3)</sup>であり、また四項は「一つの番組を対象にしない」とされてきた。私はメディア企画担当として放送制度にも関わったが、行政の立場からも「放送法ほど憲法との関係を直接的に反映している法律はない」としばしば語られていた。行政が法制度に詳しいのは当然であるが、その中でも法制度に精通しているといわれた金澤薫氏(元事務次官)が著した「放送法逐条解説(改訂版)」「情報通信振興会」においても、「本法の規律についても一義的には放送事業者の自律に任せるべきであり、政府による公権力の行使は極力避けるべきで



ある「と記されていることから明らかである。この記述は、「表現の自由（憲法21条）との関係を踏まえた論理構成となっている。また、政府与党関係者が度々発言する放送法174条（業務の停止）あるいは電波法76条（無線局の運用停止・免許の取り消し）についても第一義的には自主規制によるものであることを念頭に置き厳格に行う必要がある」とされている。放送法（電波法）の体系は行政の側からさえるこのように抑制的に適用されるべきとの認識されている規制体系なのである。

このことが具体的に法的に示されているのが、放送局免許が施設免許であって事業免許ではない（間接規制）という点である。つまり、あくまでも番組編集は、放送事業者の自律を前提としているのであって、いわゆる基幹放送メディアにおけるハード・ソフト一致原則（無線局免許所有者が番組編集責任を負うこと）も、その自律性が電波法・放送法体系として法的に構成されているが故に成立するのである。この間接規制という考え方は、周波数監理と表現の自由との関係を両立させるなかなかの工夫であるように思われる。もちろん、ここでは行政裁量が働くのであり、したがって放送事業者はその緊張関係を承知しつつ主体的なアクション（報道・編成・制作行為）が求められることはいくらでもない。ここに至るまで、行政も立法の趣旨を踏まえて抑制的に裁量してきたものと考えられる。放送法と民放との関係でいえば、民間放送（一般放送事業者）の存在理由それ自体が「言論の多様性・多元性・地域性」という公放送の理念の具体的表れであり、それが

「放送法」の存在理由の一つであるあることを思い返す必要がある。とうとうネットでは枝裕和氏の放送法論を読んだ。先に触れたように、的確な論考に感心した。

<http://www.kore-eda.com/message/20151107.html>

<http://www.kore-eda.com/message/20151117.html>

そのうえで、映画監督であり、制作会社アプレビマンユニオンのメンバーである星枝氏がこれだけ放送法と放送番組についてきちんとした認識に立って発言をしているのに、放送局からこの問題について直接的な発言が聞こえてこない。BPOを防波堤にして自分分はトーチカに入っているつもりなのだろうか。放送は規制の外には出られない、それは原理的問題なのである。規制とは何か。何故規制があるのか。規制の下での自由とは何か、などとは、局がまず考えるべきことなのだ。それは、メディア担当者、法務担当者の問題でもなければ、民放連が代弁することでもない。まず、放送局経営者が「放送の哲学」経営哲学の問題として、さらにはジャーナリズムの原点として考えるべきことなのだ。

#### 「補遺」私的放送法体験

郵政省、総務省との関係は、メディア企画担当になった1984年からタイアした2010年までだから、かなり長かった。ハイビジョン、BS参入、地デジが主な関係だったが、制度問題についてもいろいろ議論をした。役人と法律論争しても勝ち目はない。それは、ロジックの問題ではなく、裁量の問題

題だからだ。それでも、こんな経験はある。あるとき、当時の郵政省の幹部と話をしていた。「役所の存在理由ってなんだと思えますか？」と聞かれた時がある。与党による番組介入に関することだと思った。彼ら曰く、「役所の行動原理は法律です。若し、政治が法を超えて介入しようとするれば、役所はそれに抵抗します。政と官はそこが違います。」

政と官の力学が違うことは良いことだ。その時、チョット感心した。しかし、今、政による、官の支配が進行している。これも55年体制の終焉の一つであろうか。

Ⅲ. では、「放送は規制の外に出られない」とはどういうことか。

「ネットモバイル時代の放送」\*より

\* 日本民間放送連盟編前川他共著2012

第9章(二)はメディアの現在をCITス

キャン「断層撮影した」マスとソーシャ

ルを考えるー(前川英樹)

「私たちが3・11に見た津波の中継映像が圧倒的だったのは、この状況と(情報と)の同時進行性にある。放送は何故免許制度の下に置かれているかといえば、一般的には周波数の有限競争希少性や社会的影響力の大きさなどの理由が挙げられている。加えて、技術的には混信防止のための周波数監理という事情もあるだろう。しかし、本質的には権力による時間管理という電波メディアの構造に因る理由があるように思われる。つまり、(状況と(情報と)の同時進行とは、権力の管理を越えて電波メディアが本質的にもっている時間制連続性が剥き出しに

なっている状態なのであって、あの津波映像はまさにそのようなものだったのだ。もちろん津波がその時に政治的現象だったと言っているわけではない。\*本稿のための補遺こうした電波メディアの潜在的・本質的特性が、放送の規制原理として国家によりどれほど意識されているかは定かではない。しかし、もし放送が自ら言論表現の自由について語るならば、この管理を越えた時間とどう認識し、論理化・方法化するかということは避けられない。このことは、編成という行為の根本問題でもある。編成とは、個別の番組のラインアップだけでなく、ある状況で同時進行的行為を選択し決断する行為でもある。その意味で、(一)権力の時間管理、(二)放送局の経営意思、(三)編成判断、(四)現場に向き合っている記者は、時間性を巡ってそれぞれに原理的な緊張関係におかれるはずである。原則的には(三)は(二)を代行すると考えてよい。

20世紀後半の世界中的な政治環境の変化(しばしば、革命と呼ばれる)で、放送局をどの政治勢力が支配するかが重要な争点であるのは、国家という空間管理のためには、時間管理が必須の条件だからであろう\*。テレビ・ラジオの情報、このような形式「関係」として作りだされる。

\*以下、本稿のための筆者による補遺  
昭和20年、満洲国崩壊の際に満洲映画協会満映の映画機材の所有を巡って、ソ連軍、国民軍、共産軍が争ったという。ここでは、権力闘争とメディア関係が物語られている。  
ソーシャルというネットワークで形成される情報空間において、情報発信者が随時情報

を公開し更新することができるのに比べれば、放送は放送という形式の外に出られない。「インターネットの自由」とは、マスメディアである放送に比べれば、個的なつながり「ネットワーク」によって形成され、はるかに融通無碍であり、管理の困難性は高いということだろう。さまざまな情報が自主的に交換されることで、中心が不在の、あるいは多心的な空間ないしは関係が成立する。」

\*\*\*\*\*

そのうえで、次のように考えてはどうだろうか。

シンポジウム「ネット時代、放送はシラカンスになるのか？」放送人の会2008年のポイントを本稿のために書き改めてみた。

1. テレビが構成する情報空間（図参照）
2. この情報空間の基本は「テレビのライブ性」であり、その危険を予見したため「免許制度」が適用された。このテレビメディアに構造的に組み込まれている緊張感を喪失すると、テレビはただの電子メディアになる。
3. テレビの情報空間は、社会的に「三点で構成されている。

- ①異議申し立て機能（先行する活字メディアから継承）
- ②共通の意識空間の形成（「想像の共同体」）
- ③大衆の眼差しの集約（欲望の集約／プロモーション）

①は、ジャーナリズム（言論表現の自由／市民に、

②は社会安定装置（想像の共同体／国民）に、

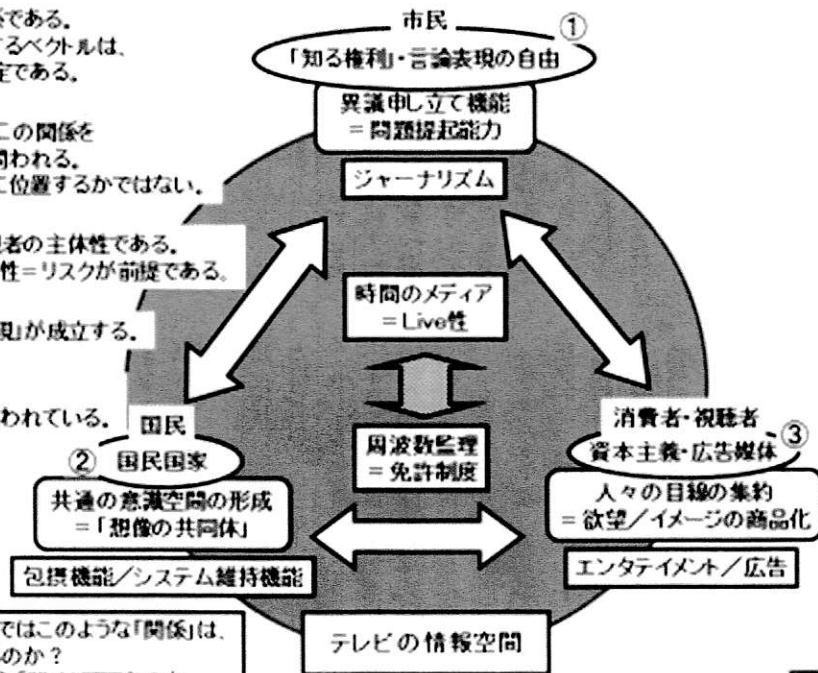
③はエンタテインメント（広告産業（大衆の眼差しの集約／消費者）に、

それぞれ対応している。

### テレビジョンを構成する「力学」…テレビ行為のスリリングな構造

三点構造というのは、最も安定的な構造に見える。…しかし、実はそうではない。

1. 図は、ベクトルの関係である。このテレビを構成するベクトルは、状況として常に不安定である。
2. 制作者＝表現者は、この関係をどこで突破するかを問われる。…この関係の何処に位置するかではない。
3. それが制作者＝表現者の主体性である。表現行為とは不安定性＝リスクが前提である。
4. そこに、「テレビ的表現」が成立する。
5. テレビ局経営も、同じこと＝リスクが関わっている。



\* では、インターネットではこのような「関係」は、どのように成立するのか？  
あるいは、そのような「関係」は不要なのか。

BTBS-MRI

その中心にあるのは、テレビの「時間性」という特性であり、その「危うさ」故に、国家は周波数監理＝免許制度を適用している。つまり、規制＝免許とは、①、③より②を優先させることで、「時間管理」による空間管理」を目指すシステムである。だから、「放送は規制の外に出られない」のである。しかし、であるが故に、「放送における自由」を考へることに意味がある。放送のあらゆるジャンルがジャーナリズムであるとするれば、制作者も経営者も放送に構造的に組み込まれている「規制」と向き合うことで、放送における自由をより深部から問い返すことが可能になるし、また問い返さなければ「何のためにそこにいるのか」という問いが、それこそ問い返されるであろう。

□ 参考

・「いつまでもなく、この発想はTBS闘争における「テレビジョンは時間である」という提唱が原点である。

「お前はただの現在に過ぎない」(1968 萩元村 木今野) / 2008 文庫版再刊「ほくろのテレビジョン」(1971 村木)

・「想像の共同体」(ヘネテイクト・アンダーソン) <近代>あらゆるものの均質化＝時間の多様性の喪失

・◇大衆のまなざしの支配」(「近代のグラフィズム」 柏木博) ヘロシヤ・アバンギャルドもハリウッド映画も対外宣伝雑誌「FRONT」も、形式が同一なら、その表現の意味は基本的に変わらない

・「現実の問い直しは、もはや哲学からではなく、ヴァーチャル・リアリティとその技術からやってくる」(シヤン・ポードリヤール)

4. 二点構造は、図式化すると「見極めて安定的に見えるが、実態はそうではない。この三点の力学は常に変動的・相乗的である。5. では、テレビ番組の制作は、どのような関係におかれるのか。

6. 様々な制約の中で、制作者はこの関係の何処に身をおくのかと理解されがちだが、実はそうではない。

7. この関係全体とどう向き合うか、どこでこの安定的な関係を突破するか、そこに主体性がある。不安定性・リスクが表現の原点である。

8. そこに「テレビ的表現」が成立する

9. これは、同時にテレビ局経営者にとっても同じことなのである。

10. では、インターネット上の情報について、このような問題意識はどのように成立するのか。あるいは、問題意識は不要なのか。\*\*\*\*\*

このように放送法、放送制度の問題を考えると、「放送人の会」として入制度問題プロジェクトが成立してもおかしくない・・・というが、そのような活動があつてしかるべきであらう。

それだけの力量（人、金、能力）があるだろうか、私たちに。

IV. 状況の劣化と制作者にとつて楽な時代などなかったとの交点へ文化で政治を撃てるか「戦後70年 テレビは何を伝えたか」被害と加害のはざままで（主権、放送人の会・明治大学社会福祉中研究会 明大和泉校 舎図書館ホール2015.12.6）のあと。

とその現在が思いのほかはつきりつきり浮き彫りにされたこと、②「自虐」の登場以来のメディア状況の劣化と制作者にとつて楽な時代などなかったという論点が交錯しないうまくまだったこと、この2点が強く記憶された。そして、「近代の超克をどう超克するか」という意識は、私の中で今回もそのまま持続している。（「放送人ブログ」前川日記）

もう少し踏み込んでみよう。

① 被害と加害 放送人の会が「このシンポジウムを企画したのは、「安保法制に反対する有志の声明」についての議論で、（会としての）声明」より、そのことを語れる「場」としてのシンポジウムという提言があつたからだった。（「章人私的総整理を参照」）

② 少し遡れば、2014年「日韓中テレビ制作者フォーラム」で日本参加作品「其町アバウト」（NHK広島）を巡る中韓両国からの批判戦争が「始まった」のではなく、戦争は日本が「起した」のだから受け止めるか、ということの継承でもある。

③ 自らの加害を捉え返すことにより、他者の加害を対象化することが可能となる。そこから、歴史における人間の責任を語ることが出来る。「広島、長崎の原爆投下」についての論点も、そこに関わる。

④ さて、そこであるとして、戦闘における勝者を加害者、敗者を被害者と呼びたい。被害者とは戦闘員ではなく基本的に生活者であり、加害者とは国家（軍事）あるいは国家意思の代行即ち政治的表現としての加害者を行う者であつて、それは権力の行使である。個々の加害者の意識の問題ではない。

⑤ 生活者と政治「政治の幅はつねに生活の幅よりも狭い。本来生活に支えられているところの政治が、にもかかわらず、屢々生活を支配している」とひとびとから錯覚されるのは、それが黒い死をもたらす権力を持つているかに他ならない。「（幻視のなかの政治・序詞権力について）壱谷雄高。生活者として存在することそのものが、既に政治的なのである。それが「錯覚」であるとして、「錯覚」とはまさにそれ自体が政治的なものなのである。壱谷雄高風に言うならば、権力はその錯覚を放棄することはないであらう。

⑥ しかし、「戦争における加害と被害の関係」においては、その錯覚が直接的に「黒い死をもたらす」現実として現前化する。

⑦ 政治と生活の政治的関係がそこであるとして、「にもかかわらず」、あるいは「であるがゆえに」、メディアに関わるということにおいて、「政治」に対しても一つの政治を対峙させる選択は不毛である。

⑧ 壱谷の箴言の「生活」を「文化」と置き換えてみよう。政治と文化の逆転、文化を政治の風下においてはならない」とは50年の一つのテーマであり、あのTBS闘争においてもそのように語られた。50余年後の現在もそれは変わるまい。

⑨ シンポジウムで「自虐史観」と呼ばれる（反知性的）歴史認識の登場以来、メディア状況は著しく劣化してきた（「金平発言」という指摘がなされた。この時代の酷さについて抗するか、それがメディアにとつて極めて重要な今日的課題だ、ということだ）。

⑩ これに対して、「制作者にとつて楽な時代など一度もなかった」（今野発言）とい

う発言が対置された。その交錯する地点で議論は深められなければならないので。

⑪ 思うに、「楽な時代」など一度もなかったから「状況の劣化」を放置する乃至は容認するのではなく、「状況の劣化」を制作者（文化）としていかに撃つか、ということこそ、「放送人」の立ち位置であらう。文化を政治の風下におかないとは、そういうことなのであるまいか。

⑫ 「劣化の進」により、ますます「楽な時代」でなくなりつつあるのだから、制作者の仕事は尽きないはずである。

⑬ かつてこう書いたことがあることを思い出した。「メディア論から政策は生まれない。政策とはそういうものである。しかし、メディア論から政策を撃つことは可能であり、それにより生まれる両者の緊張がより高度な政策を生む。」（「テレビジョンとインターネットの『入れ子構造』という仮説について」(2006.前川)

⑭ 個人として否応なく状況に関わるための選択から逃れられない時代に入ってしまった。「錯覚であるにせよ」存在することそれ自体が政治的であることは、まさに壱谷雄高が見抜いたとおりである。

⑮ だから、文化から政治を撃つことは、根源的な地点で文化的であることであり、それがテレビ的ということであらう。

⑯ II章で制度についてスケッチしてみたが、放送人が制度を考えるということは、メディア論との関係で語られるべきであらう。

V. 国家と個人―私たちは、問うべきことを



70年間問うてこなかったのではないか—

「放送人の世界相田洋々人と作品」(主催  
放送人の会・上智大学情報メディア学科  
12/11・12 上智大学)

(「放送人ブログ」(前川日記)より・一部修  
正)

「解体く興安丸の一生は、引揚船興安丸解  
体の記録の間から、中国における日本人の体  
験(加害)と、日本における中国人の体験(被  
害)、が見事にモンタージュされている。

あるいは、無差別爆撃から私たちは何を読み  
取り、何を問い返すか、そのことが迫ってく  
る。

私たちは、問うべきことを70年間問うてこ  
なかったのではないか。

「東京空襲」、その時私は4歳。都心から  
少し離れた江戸川を超えたところに疎開し  
ていたはずだ。最初の記憶の一つは探照灯に  
照らされたB29。ふたつ、多分、である。

思えば、その時代をどう過ごしたのかは定か  
ではないが(その時父不在、母は敗戦直後に  
死亡、身近に誰も語ってくれる人がいない)、  
良く生きてきたものだ、と思う。生き残った  
者によって歴史は語られる。死者の歴史は誰  
が語るのだろうか。ドキュメントの意味がそこ  
にある。

旧満州引揚者の相田氏は、「あの時、国は  
人々を棄てた」という。

その思いから、引揚者へのこだわりがモチブ  
ーションとなって「解体く興安丸の一生」  
(1971)や「移住く31年目の乗客名簿」、

そして「母と歩いた道」(これは、母の介護  
と満州生活や引揚体験を重層的に記録した  
作品)が制作された。電子技術も自動車も、

そういう思いでドキュメンタリーにしてき  
たのだ、とも。

この発言を聞きながら思い至ったのは、「戦  
後入門」(加藤典洋)の一節だった。

後に作家になり「ベ平連」の中心を担うよう  
になる小田実は、少年時代に大阪空襲で逃げ  
回ったときに、そうして多くの死者とともに

あるときに、彼の中に個人と国家の乖離の  
意識が生まれたという。これについて、加  
藤典洋はこう書いている。

「そのときの国家原理は『大東亜共栄圏』で  
あり『天皇陛下』でした。戦後、それは『自  
由』と『民主主義』に変わります。でも、戦

後も、その新しい国家原理との間に、『い  
ちがいの』感覚は消えずに残った、そう彼は  
述べるのです。」

その感覚(国家に担われた自由と民主主義と  
いう国家としての普遍原理と個人との  
乖離)が、小田実においてはベトナム反戦に  
つながっている、ということなのだ、と。

これは、「放送人の世界」の初日に観た「東  
京空襲」に関わる問題だ。そしてそれは、  
加藤の指摘する「原爆投下の責任を問う」こ  
とにそのまま直結していく。

「敗戦」ということと「戦争について問うこと  
の放棄」は違ふ。私たちの敗戦後における主  
体性の問題がここにある。自らの加害責任を  
認めることは、同時に他者の加害責任を問う  
ことを可能にするのである。それは、国家原  
理としてではなく、個人責任(個人と歴史)

世界との関係の問題なのである。

そして、もう一つ。個人と国家の乖離の意  
識を、戦前の日本人は何故思想として取り  
出せなかったのだろうか。それが近代の超

克の問題なのである。今その乖離をきち  
んと取り出しておかないと、このさき再び  
近代の超克が再生しかねない。そこに戦前  
の思考(柄谷行人)という提起のあり方の  
緊張がある。

だから、相田ドキュメンタリーは、相田氏の  
極めて強い個人体験職が底流にありつつも、  
そこからそれを超えた日本の近代思想の原  
点が見えてくるのである。制作された番組  
は、制作者の意図や籠められ思いはるかに超  
えて、見られることによる独り歩きが始ま  
るのだということの、まことに分りやすい、  
かつ強烈な事例であるように思われる。

というようにことを思いつつ、そういうには、  
あるとき、「一神教、貨幣、国家がなかった  
ら、人々はもう少し幸せではなかったか」と  
語りあったことがあったことを、唐突に思い  
だしたのだった。

VI 広河は私に確認させてしまった、「サボ  
るな」と。「広河隆一人間の戦場」を観た。

「監督長谷川二郎プロデューサー橋本佳子制作  
ドキュメンタリージャパン」  
(以下、「放送人ブログ」(前川日記)再掲  
一部修正)

フォトジャーナリスト広河隆一の仕事は、  
「パレスチナイスラエル関係」から始まる。  
まず、そこに強く共感する。

なぜならば、パレスチナ問題は、現代世界の  
根源的意味を持つと思っただ。

(加藤典洋に做つて言うならば)第二次世界  
大戦(あるいは20世紀的秩序)の意味付け  
が、(連合国)民主が枢軸国(ファシズム)(反  
民主)に勝利した戦争として定着された

すれば、そのポジがイスラエル、ネガがパレ  
スチナということか、と思っただ。映画は、  
イスラエルによるパレスチナ入植とそれに  
対する微かなしかし強かな抵抗の数分間の  
イントロダクションがあり、それを切断する  
ように東京の情景が映し出される。パレス  
チナという非日常と東京の日常。この衝撃的  
な構成に圧倒された。

いや、そうではない。パレスチナの日常と東  
京の日常。  
では、東京の、日本の、私たちの非日常とは  
何か。

そう思わせてから、広河の仕事はフクシマと  
チエルノブイリの日常。非日常に向き合う。  
どのような人々にも幸せに生きていく権利  
があるのであって、それがジャーナリスト  
の背中を押すのだ、彼はいう。

そういうドキュメンタリスト広河を、ドキュ  
メンタリー監督長谷川二郎が追う。その二重構造  
が現代性という状況に対する視点を重層的  
に提示している。それが良い。

私と広河はほぼ同世代だ。  
その広河隆一は「体が拒否しても、行かなく  
ていい理由がない」という。

彼の圧倒的存在感が私を刺戟する。  
今さらフォトジャーナリスト、あるいはその  
ようなものになれるわけもないが、では自  
分は何ができるのか、と。

「自分で自分が生きる時代は選べないが、自  
分が時代とどうかわるかは選択できるで  
はないか」と。私が「世界を考える」原体験は、  
一に親との関係(の欠落)、二に60年安  
保、三にTBS闘争だ。しかし、思えばその  
ような体験で世界を考えるとということには、良



い時代だったともいえるだろう。このまま終  
われれば、「まあ、こんなもんか・・・」と  
いうことで良かったのかもしれない。が、そ  
ういうわけにも行かない時代になってしま  
った。

広河は私に確認させてしまった、「サボるな  
よ」と。

さて、残りの時間をどうしようか。  
このドキュメンタリー映画、映像も良いが  
(撮影山崎裕、特に音が凄い(録音森英司)。  
強く印象付けられた。

\* 前川日記番外編・・・この季節の雨は、ある  
情景を思い起させる。自分と世界との関係の始  
まりを、私は知らず知らずのうちに意識してい  
たに違いない

http://hosojin.com/a-blog/mekawar/entry-461  
html

Ⅶへ「戦後」の終わりのアポリアー「戦後  
入門」(加藤典洋)を読む

① 加藤は、まず第二次大戦の意味付けを明  
らかにしようとする。戦勝国の論理(理念と  
戦後の世界秩序)とは何か、そこから始める  
のだ。

② その論理と核兵器との関係、核兵器と戦  
後の政治力学。

③ そのうえで、日米同盟(対米従属)と自  
立(あの戦争はナシにしよう、という歴史  
認識)の捻じれ、すなわち現政権の齟齬・矛  
盾を突く。

④ これに対応していわゆる護憲勢力の論理  
を究明する。

⑤ そこから、「左折の改憲」、国際秩序と  
敗戦国日本の原形的関係を憲法に書き込む  
ことによる(9条)の強化を提言する。

⑥ 理念とリアルポリティックスを対峙させ  
ることで、政治における(理念)の意味を明快  
に括り出す。

⑦ 「戦後」とは何だったのか。こちらから  
問いかけ、そして向き合うことの重要性が良  
く分かる。

⑧ 「戦後の終わり」はこの問いから始ま  
る。

⑨ この問いを、彼等にさせてはならない。  
私たちが、その問いの主体になること、そ  
れが加藤の渾身の、問いなのだ。

新書版で600ページを超えるという異例  
といていい試みは、私には刺激的だった。

「この批評家を孤立させてはならない」と  
いう原武史の評に同意する。何故ならば、加  
藤が取り出した問題は、いわゆる左右が踏み  
込まなかったが故に(左右のガードは甘くな  
り、それが現在の状況に至る一つの要因では  
ないか、と思えるからである。

例えば、以下の論点を私たちはどう考えて  
きたであろうか。

1. 「護憲」という理念／選択と「核の傘の  
下」という現実とを、どう論理化するのか。  
自衛権のあり方についての原形的考察。こ  
の時、(理念)／哲学が意味を持つ。1945  
年に「敗戦から革命へ」というレーニンの?  
選択はあろうはずもないが、ゲリラ的「戦争  
継続」＝反連台軍の戦闘は何故起こらなかつ

たのか。

\* 参考「戦中派木戦日記」(山田風太郎)「民  
主と独立」(小熊英二)・・・そういえば、「民  
族独立若動隊」っていう歌があったわけ。

2. 一億玉砕が瞬時に一億総懺悔に転じたの  
は何故だろう。そこに天皇制の秘密はあるは  
ずだ。私たちは、それを対象化し、思想化し  
てきたのか。これらの論点の回避乃至は見  
みぬふりについての検証。

3. 旧左翼とは別に、現在「対米従属」敗戦  
構想継続」批判が「戦後の終わり方」として  
論点になっているが、その場合(ナシヨナリ  
ティーと自分)との関係をどうとらえるの  
か。ナシヨナリズムとの思想的あるいは論理  
的差別化は可能か。

4. その先には、近代国家の在り様そのもの  
についての考察が求められる。個人と国家と  
の関係、人は国家なくして生きられるか、な  
ど。

5. これらを含めて、「何のための敗戦か」、  
そして「戦後の終わり」をどこから始めるか  
問題になるのである。\*

6. 歴史は生き残った者によって書かれる  
では死者のための歴史は誰が書くのか。ド  
キュメンタリーあるいはテレビジョンの仕  
事はまたまた終わらない。

\* 「ハンナ・アーレンが」が映画化されたよう  
に、「近代の超克」のテレビ化は可能か(前川  
TBS調査情報522 2015-1-2)より  
「・・・が、歴史(History)が許されるとしたら、  
次のようなことを考えてみてはどうだろう。

若し、そのような(対米)和平工作が成功し  
ていたら、数百万の犠牲者は救われ、産業や  
文化の破壊・消耗は回避されたであろう。だ  
が、そうであったとして、私たちはどのよう  
な時代を(今)として生きていたであろう。欽  
定憲法による絶対天皇制国家は継続し、大日  
本帝国の強大な軍力の下での平和を生きて  
いたのだろうか。さすがに治安維持法はな  
くなっていたかもしれないが、朝鮮半島と台  
湾の独立闘争は間違いなく激しく起って  
いたであろう。で、満州は？そのような歴史の  
(if)を考えることは許されると思ふ。その  
延長上に、「日本人は自ら(連)選択をする  
力があつたであろうか」という、さらなるif  
が来る。

だから、私たちは1945年の敗戦をどう引  
き受けるか、というところから考えるしかな  
いのだと思う。その引き受け方に決着をつけ  
ていないところに、つまり敗戦に至る近代の  
破綻の仕方に決着をつけていないところに、  
この国の、そしてこの国に生きている人たち  
の現在がある。そう、私たちはチャンと負け  
ていないのだ。そこをはっきりさせないから  
東京裁判をチャラにしようということにな  
りかねない。「一億玉砕」が一夜にして「一  
億総懺悔」に代わってしまったその変わり身  
の中で、そして敗戦後の表層雪崩のような思  
想転換の中で、その底流にあった「近代前期」  
の歴史の意味を確かめることを私たちは放  
棄してきた。その付けが今来ている。だから、  
くどいようだが「近代の超克」に拘るのだし、  
その延長の「近代の超克の超克」が思想テー  
マになるのだ。戦後民主主義のプラス価値を  
私は高く評価する。だからこそ、それを一つ

の伝統的歴史の成果とするためにも、戦後思想の知的営為を継承しなければならないのである。」

(内) は本稿のために追記

VII 取り敢えずのまとめ。

—2016年の公私のポジションは何処か

1. 自分の生きる時代は自分では選べないが、その時代とどうかわるか自分では選べる。  
2. 世界は(つまり、日本も) 間違いなく流動化、液化化し始めた。20世紀的構造の崩壊・・・。

3. 改めて自分の立ち位置を確かめたいと思っ。

4. だから、この秋国会前に2度ほど行ったのだ。

5. 今、この国に希望というものがあるとして、SEALDsなどの若者たちがネットでも聞いた彼等のいくつかのスピーチに、何度かホントに感動した。

6. けれども、彼らもどこかで、①政治的組織の問題②合法的運動と非合法的抵抗というテーマに直面するだろう。それは、装甲車に封鎖された国会前道路と国会構内という空間に包含された権力関係の問題だからだ。

7. 60年安保、あるいは全共闘運動の歴史的評価と継承はありうるかどうか。

8. 戦後とは何か、あるいは日本と世界の近代の関係をどう考えるか、そして今な

お近代以前の世界に生きている人々の人生はどう考えればいいのか。

9. 少し、具体的にいうならば、現政権のよゆうな歴史認識を突き詰めると、日米同盟(対米従属)という政治テーマとフリクシオンを起すはずだ。この捻じれを安倍等はどうするか。最終的には前者を基本とする路線が露呈すると推測するが、どうだろう。

10. その時、第二次大戦の戦勝国が作った「構想と理念」とのバッティングは避けられない。そこで何が起るのだろうか。そうはしないためのActionは何か。

11. 一方、「護憲」を政治的選択の基本とする場合、ナショナルリティー(国家と自己)との同一性(の問題)をどう考えるのか。また、国際関係におけるこの国のポジション、例えば「核の傘の力学」をどう論理で受け止めるのか乃至は排除できるのか。あるいは、自衛権という概念そのものをどう認識するか、これまで明確には詰め切っていないテーマに向き合うことは避けられない。

12. 戦後の終わりのアポリアである。

13. 「戦前の思考」(柄谷行人)を読みなおした。「戦後入門」(加藤典洋)を読み終わったところだ。あるいは白井聡、内田樹、小熊英二の著作などからも刺激を受けた。併せて、やはり「近代の超克」論に強い関心がある。なぜそのような思考がありえたのだろうか。特に、竹内好のアジア論は、改めて再読、再検証されるべきであろう。

14. 2011年、大震災から9か月後たつ

たが東北被災都市数が所に足を運んだ経験は大きい。フクシマには入れなかったが...。III章で触れた「ネットモバイル時代の放送」(第9章)は、メディアの現在をCTスキヤン(断層撮影)したトマスとソーシヤルを考える一は、被災地に行かなかつたら書かれることはなかつたであろう。

15. ...というように「放送人の会」の放送人ブログ(前川日記 & 「SPECIAL」)に書いています。参照してください。 <http://fsojin.com/a-blog/>

16. 直接的な行動でなくとも、自身の「戦後」あるいは「戦後の終わり方」についての記録を書いておく意味はあると思ふ。個人としても世代としてもそれはやっておくべきことなのだ。それからの時間をどう生きるかはもちろん大きな問題なのである。今の時代の「終活」はそのようなこと、つまり語り、そして記録すること、含まれるようだ。

18. いまこの時代に、私が引き受けるべきことは何だろうか。そして放送人とは何か。そして最後に、ムーブメントとしての「放送人の会」は、ありうるか? 多分ないな...

それは、やはり個人々々としての時代への関わり方の問題であり、「会」はそのための場として機能することが良いのであろう。文化から政治を撃つためのベースキャンプのような。

\*\*\*\*\*  
\* テレビ論のためのメモ

TBS闘争、そして「お前はただの現在に過ぎない」(萩元、村木、今野)、及び私に強い刺激を与えた村木良彦氏のテレビ論については以下を参照。

ノート Maekawa M&T  
No91 「追悼 村木良彦さんのこと」

<http://www.tbs-tri.co.jp/archives/media/edia080201.html>

No92 「もう一度 村木良彦さんのこと」  
「エレクトロニクス・コピー・メディア」

「私」  
<http://www.tbs-tri.co.jp/archives/media/edia080215.html>

No93 「村木良彦氏のテレビ論について」  
「ノート・補遺」ーテレビジョンの可能性と不可能性ー

<http://www.tbs-tri.co.jp/archives/media/edia080301.html>

No108 「記録の意味ー「お前はただの現在に過ぎない」文庫版再刊について」  
<http://www.tbs-tri.co.jp/archives/media/edia081015.html>

No109 私的解説:「存在論的・テレビ的」  
続・「お前はただの現在に過ぎない」文庫版について

<http://www.tbs-tri.co.jp/archives/media/edia081101.html>

自分のいるところが、テレビジョンー村木良彦さんを偲ぶ会ー